革命の旗　1977年4月12日第三種郵便物認可　創刊2号（毎月5日発行）

日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命を掲げ，〈戦争と革命〉の80年代へ進撃せよ！

革命の旗

共産主義者同盟（革命の旗）
中央機関紙

創刊2号
1979．9．10

定価200円

発行人　北沢晋
発行所　赤流社
連絡先　TEL(03)407-3511
東京都世田谷区局号
千歳郵便局
私書箱4

年間2500円（開封・送料共）
3000円（密封・送料共）

今号の内容

＊第一回大会政治報告〈上〉……2～5面
＊10・8共産同（革命の旗）政治集会へ！……3面
＊中央学生組織委員会論文……6面
＊第四回全障連東京大会報告……〃
＊社会主義労働運動の創建を！……〃
＊カンボジア人民支援闘争を打ち立てよ！……7面
＊新しい風が吹いている……〃
＊沖縄解放の新たな闘いを構築せよ！……〃
＊9・16三里塚現地へ結集せよ！……〃
＊東峰だより、東峰団結小屋アピール……8面

読者諸君・同志諸君！　共産主義者同盟（革命の旗）の結成から一ケ月を経過した。「マルクス・レーニン主義の単一の全国党創建に向け、新たな長征へ出発せよ！」という我々の呼びかけは、全国の共産主義者・先進的労働者、先進的農民・学生の熱烈な支持を得た。我々は、結成の意義を踏み固め攻勢的党建設に出撃せねばならない。現在の情勢は、プロ独の準備をプロレタリア階級に全面的に整えさせるという任務を我々に課している。然り。我々は、秋期人民闘争の先頭に立ち、この闘いにプロ独・社会主義革命の思想を注ぎ込み、社帝派、急進民主主義を批判し、社会主義的プロレタリアートを広範に形成しきること、かかる全成果を十・八政治集会へ絞り込み、打ち固め、もってプロ独を全戦線で準備する攻勢的党建設の第一歩とし、第二歩へと進まねばならない。

読者諸君・同志諸君！　真の長征・〈戦争と革命〉の八〇年代へ出撃せよ！

秋期人民闘争を闘い抜き 10・8 共産同政治集会の勝利を戦取せよ！

日本帝国主義の反動と戦争策動は新たな局面に向いつつある。日共現代修正主義をはじめとした議会主義野党から「民主と対話」の政権、「連合時代」へのかけ橋として賛美された大平政権は、増々帝国主義野望の実現のため、ひた走っている。むしろ前福田政権が公然と掲げた帝国主義戦争のための挙国体制づくりを「保守・中道」連合構想等をちらつかせ、小ブルジョアジーの「高度成長」時代の夢をも組織化し着実に進め「有事立法」の実質化、金融独占資本による大衆収奪の国家的実施の強化、治安体制の整備を巧くみになしてきている。

とりわけソ連社会帝国主義がベトナムを足ががりとしたアジア南下政策を強めることに対抗して、日米間の安保体制は実質的な戦争体制づくりへと転換した。八月一八日から始まった米第七艦隊と在沖米軍の軍事演習が持つ意味の重要性・政治的性格は次の点にある。この七月の山下防衛長庁官の訪韓・三十八度線の視察、そして訪米と米国防省との米日韓軍事体制の緊密化の協議とNATO視察後の公然たる行動であり、これは六月東京サミット後のカーターの訪韓と米地上軍の撤退の凍結発表後の進展してきた事態であり、日本帝国主義が日米安保体制の下で、朝鮮侵略反革命遂行への準備を内外に公然と宣言したものに他ならない。

われわれが注視しなければならないことは、ソ連社会帝国主義との世界再分割戦に備えて、日帝は米帝との軍事同盟を強化せざるをえない点である。こうした中で日帝は一方では朝鮮南半部での権益防衛に「日韓運命」（金丸発言）を強調するとともに、他方ではアラブ資源諸国への「援助増大」とPLOの「承認」をちらつかせ、またカンボジア問題での、「中立」的態度等「第三世界寄り」をうかがわせるようである。だがしかし、これら自身今日の米帝の一時的後退による帝国主義世界支配体制の動揺と分解のなかで成長してきた日帝の歴史的要因と国際的地位によっている。これは日帝の一時的「息つき」であり、カーターの「人権外交」の見せかけと同様に、巻き返しのための糸口である。こうした事態こそ第三世界諸国の「新経済秩序の確立」、被抑圧人民の民族解放・民主主義革命の前進という民族解放闘争の発展と、ソ社帝の世界支配への登場・それも米帝との争奪に一定勝利しつつあるとう今日にあって依然として軍事的・経済的に二流帝国主義である日帝の、矛盾せざるをえない国際的地位を示している。こうしたことこそが、米帝、西欧帝との経済的矛盾をかかえた日本帝国主義の体制的危機の深さ、広さに他ならない。だがこれ自身、「三つの世界論」を世界革命戦略として把える「毛沢東思想派」の多くが見るような「動揺するのみ」の帝国主義ではありえないし、ましてや大平・田中連合派の「抗ソ・連中・民族防衛・独立自主」なるものは帝国主義民族としてのすなわち金融独占資本の防衛と、ブルジョア階級独裁とその国家の防衛であり現在日帝は、アジアでの政治的指導権確立へと必死なのである。帝国主義の金融独占資本の富致的欲望、その軍事的・政治的行動は決してそれ自身で止むものではない。だからこそ日帝の体制的危機を促進している被抑圧民族の　反ソ反米反覇権と結合した日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命を目指す日本プロレタリア階級の奮闘こそ第一のカギとなるのである。

とまれ、日帝の体制的危機はソ連社帝の世界支配への進出によってもまた加速されている。中核派を代表とする反スタ・トロッキズム潮流が、ソ米の覇権争奪戦を、帝国主義間争闘戦として把えきれないことは、またまたこの日帝の体制的危機―帝国主義間矛盾の政治的性格を日米間の帝国主義対立から「朝鮮―アジア」における独自な勢力圏の形成のための争闘戦として位置づける。それ故、日帝が日米安保体制をその権力の維持として押しだし、他方日本プロレタリア階級・勤労人民にこの「容認」を強いていることを見抜けず日米安保粉砕闘争に対する日和見主義を帰結させないではおかない。

プロレタリア階級独裁を全戦線で準備せよ！

われわれは、今秋期人民闘争の爆発を闘う際日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命の総進撃のなかで、日米安保体制粉砕の旗を高く掲げ、先進的労働者の闘いにいまだ残存するソ社帝への軽視を払拭し、日本帝国主義の朝鮮侵略反革命戦争策動を暴露し、対決していかねばならない。

帝国主義と社会主義の分裂を推し進めよ！

現在、プロレタリア階級の経済状態は大きな地殻変動を余儀なくされようとしている。これまで公然たる帝国主義労働運動をおし進めてきた同盟は、今日ではその牙をみがき「軍事増強、戦争なくして労働者の生活安定なし」とまでも言いきり、そのための「労戦統一」を全金融独占資本になりかわっておし進めている。しかし、総評の民同指導部はこの七月の第五十九回大会で、公然たる労使協調経営参加をうたい〈と右翼的労戦統一の推進を掲げ、労働組合運動の階級性を骨抜きにし、翼賛運動につくりかえることを提案し、実行している。明らかに総評の「同盟化」の開始である。これに対し一方では日共現代修正主義が「国民党」よろしく「大衆の要求」一般を対置し、実質的には彼らと同舟し、他方では王明の道を進む「毛沢東思想派」が「労戦統一」を全面的に支持し、金融独占をはげましている。しかし中・下層、未組織労働者の実力闘争は分散的であれ拡大しており、こうして日帝の体制的危機下にあって〈帝国主義と社会主義の分裂〉の端緒を公然と形成しはじめている。

今日「革命と戦争の時代」革命的情勢の端緒的開始のなかで大きな階級分化・再編の時がきた。日本帝国主義の体制的危機の広さと深さと、それによる戦争の要素の増大に対する態度は、不可避に三里塚を頂点とし帝・社帝の十字砲火に抗し闘いぬかれている、今日の人民闘争の前進をどの方向へ組織するのか、というブルジョア国家に対する態度を鮮明にさせざるをえない。

だからこそ〈戦争と革命〉の問題に対する態度の批判を〈国家と革命〉の問題―つまり、ブルジョア国家に対する態度をめぐる批判へと押し広げ、結びつけ、民社、社会党、日共等の修正主義・現代修正主義派ときっぱりした一線を引きき り、中核派に代表される急進民主主義諸派を改造―教育し、思想・政治的、組織的武装を強め、先進的労働者を組織し、プロレタリア階級独裁を全戦線で準備していかねばならないのである。すなわち中核派を代表とする急進民主主義潮流は日米安保体制によって日本の国家権力が米帝に補完され、依存し一定支配され従属していることを無視する。それ故今日の国際関係を把える際にソ社帝・米帝・日帝の相互の関係と国際的地位を正しくつかむのではなく、いきおい日帝・米帝の帝国主義の根本的矛盾の爆発をうながすスターリン主義の「帝国主義の戦争政策の対抗的促進要因」になっているとして論断する。今日の米ソ二超大国間の争奪戦の中で日米安保体制の占める反革命的軍事同盟の役割と日本人民との間の矛盾、被抑圧民族との間の矛盾を軽視せざるをえないのである。こうして、日米安保体制という権力問題に対する日和見主義を生みだしている。

第四インターが、日帝の体制的危機の促進をソ社帝の世界支配に託し、かつ、「労農政府樹立」プロレタリア革命を、「社共統一戦線」の結成の道に託していることは、他でもなく思想的立場においてわが反スタ・トロッキズム潮流の影を投影している。第四インターが「大衆」を口にし、社共の影響力をもって自らの日和見主義を弁護する詭弁こそ、被搾取大衆をブルジョア階級独裁の下に縛りつけるものに他ならない。第四インターは日帝の自民党政権を「社共政権」にとってかえることで、これをテコとしたソ連現代修正主義とのブロック化の中で果すことを熱望し、それを過渡的スローガンとして掲げる。これは帝国主義の打倒ではなく、日本帝国主義の政策の転換、すなわち日米安保体制を「日ソ安保体制」にかえることを意味しており、何ら労働者階級人民を帝国主義の、すなわち資本主義のくびきから解放していくことをめざしてはいない。

こうして、秋期人民闘争の中でわれわれは、できるだけ広範な人民を組織し、先進的労働者、農民・学生に〈戦争と革命〉〈国家と革命〉の問題に対するマルクス・レーニン主義的見地を刻みこみ、一層広く、深く修正主義・現代修正主義・急進民主主義との境界線を引ききり、もって〈社会主義と労働運動の結合〉を促し、強め、社会主義統一戦線の陣型を確固として構築せねばならない。つまり、「計画としての戦術」、正規の攻囲軍の建設である。

しかし中核派を代表とする反スタ・トロッキズム潮流の多くが米ソ覇権争奪戦の激化を軽視し「日帝の朝鮮侵略戦争」だけをとり出して「内乱」としての戦術を提起している。確かに、プロレタリア革命は内乱・革命戦争なくして闘いとることはできない。ましてや「帝国主義戦争を内乱へ」転化させることは、プロレタリア階級の最も重要な革命的戦術であり、革命的祖国敗北主義の態度のあらわれに他ならない。だがしかし、戦争は政治の継続である。しかし「戦争を内乱へ」を現在の戦術スローガンとする以上、誰れが誰れに対する戦争であるのかを明白にせねばならない。ましてや「内乱」を現在のブルジョア国家に対する戦術とするならば、それは現在の情勢を「左翼」的に粉飾した、小ブル的遊戯に他ならない。今進めなければならないプロレタリア階級の戦術は、戦争を見据え、革命に備え、敵の要塞を攻囲することである。

10・8 共産同政治集会へ結集せよ！

いまや人民闘争の発展が〈帝国主義と社会主義の分裂〉を不可避として推し進め、この闘争によって革命的精神が日本人民大衆の中に息吹を形成し始め、資本主義の奴隷制からの解放を求める声が底流となっている。われわれは、この底流を逆流させることなく、大胆に政治的決起を促し、プロ独・社会主義革命を準備する闘いと固く結合することである。

そのための第一の課題は、秋期人民闘争の先頭で闘い抜くことである。十・八政治集会を結び目として、九・八労働者集会から開始された秋期攻勢の下、九・一六三里塚から十・二一闘争への圧倒的勝利・爆発を戦取しなければならない。

第二の課題は、修正主義・現代修正主義、急進民主主義とわれわれの対立の根拠を人民に解説し、境界線を引ききることである。第三の課題は、第一、第二の課題を担い切り、果たすものとして工場細胞方式への〈党の型の転換〉を推し進めることである。　読者諸君・同志友人諸君！　戦争と革命の八〇年代に向けたプロレタリア階級の総進撃を！

10・8 共産同大政治集会
十月八日(月)午後五時半　南部労政会館・講堂
主催・共産主義者同盟(革命の旗)

9・16三里塚空港廃港・二期工事阻止
全国総決起集会
九月十六日(日)正午　三里塚第一公園
主催・三里塚芝山連合空港反対同盟

共産主義同盟第一回大会・政治報告

革命の旗

レーニン主義の第三次ブンドを結成せよ

全国の共産主義者・革命的労働者、農民・学生諸君！　われわれは今ここに、「革命の旗」創刊号で発表した綱領草案・規約に引き続いて、政治報告を明らかにする。

この政治報告は、共産同（革命の旗）結成大会で提起・採択されたものであり、総括、情勢と任務、党建設の三部によって構成されている。それは、統合の六条件と綱領草案を導きの糸として練り上げられ、統合の六条件と綱領草案の見地を、党建設の総括を通じて打ち固め、当面の情勢と実践指針に貫いて具体的に物質化する戦術を指し示している。

この政治報告は、第一に統合に到る闘いによって共通に獲得されたブントの総括を明らかにしている。その核心は、急進民主主義をマルクス・レーニン主義にとってかえ、反スタ・トロツキズムを批判して毛沢東思想を支持し、反ソ反米反覇権の国際人民闘争の大方向と日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命の結合を明らかにし、第二に当面する国際―国内階級情勢とわれわれの任務を示している。第三にブント総括を基礎として、党建設、組織思想、組織原則、組織路線を明らかにし、もって革命的党活動とは何かを示し、同時にまた党派闘争の眼目を提起している。

（なお、ここに掲載する政治報告は、結成大会で提起、採択されたものを政治局の責任において編集したものである。掲載に際して、紙面の都合上、今号と次号の二回にわけ、かつ一定の部分について割愛し、政治報告〈抄〉として発表せざるをえなかったことを断わっておきたい。その全文は、今月下旬に発刊する政治理論誌『長征』創刊号（結成大会報告集）に掲載する予定です。

〔目次〕

序章　旧共産同游撃派と旧共産同マルクス・レーニン主義派は、どこから来て何を闘い取ったか
――統合を戦取するに到った闘いの軌跡――

第一部　ブンドを全面的に総括し、マルクス・レーニン主義の第三次ブンド結成へ
Ⅰ　ブンド総括の今日的意義と総括観点
――清算主義と無総括主義に反対する――
Ⅱ　第一次ブンドの路線の総括
a　第一次ブンドのの継承すべき革命的意義
b　第一次ブンドのえぐり出すべき弱点
c　第二次ブンドは第一次ブンドをどう総括したか
Ⅲ　第二次ブンドの路線と党的敗北の総括
a　第二次ブンドの革命的意義の核心
b　第二次ブンドのえぐり出すべき弱点
Ⅳ　ブンドの総括のまとめと、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想のプロレタリア革命路線
a　ブンドの急進民主主義を清算して、マルクス・レーニン主義にとってかえ、反スタ・トロツキズムの側面を清算して毛沢東思想におきかえよ
b　ブンドの急進民主主義の「過程としての戦術」「反帝へゲモニーとしての組織活動」から、計画としての戦術・中央集権党へ転換せよ
c　結語

第二部　国際―国内情勢とわが同盟の当面する任務
Ⅰ　帝国主義と世界プロレタリア共産主義革命の時代と今日の基調
a　帝国主義と世界プロレタリア共産主義革命の時代の特徴
b　史上三度目の戦争と革命の時代の特徴
c　反帝反社帝を堅持し、三つの革命の要素を結成し、反ソ反米反覇権国際人民闘争を発展させ、戦争に備え、革命を促進せよ
Ⅱ　第三次帝国主義戦争の第一段階と革命の要素の増大・反ソ反米反覇権国際人民闘争の拡大
a　第三次帝国主義戦争の第一段階が始まっている
b　ソ社帝に対する批判・武装・闘争を強化せよ
c　革命の要素の主要な背骨・国際人民闘争の主要な推進力
d　米帝・西欧諸帝・日帝の新たな戦争準備との闘争を強化せよ
e　第三世界と日本・西欧における革命の要素の新たな成長
Ⅲ　マルクス・レーニン主義と現代修正主義への分裂と闘争の新たな拡大と発展
a　マルクス・レーニン主義と現代修正主義への根本問題
b　反帝反修から反帝反社帝への前進か、社会帝国主義への追随・従属か――反帝反社帝の旗と、反ソ反米反覇権の国際路線を掲げよ
c　革命の要素に依拠した反ソ反米反覇権か、反ソ連米擁帝か
Ⅳ　日本帝国主義の体制的危機とその歴史的地位
a　戦後日本帝国主義とブルジョア階級独裁・安保体制
b　七〇年代前・中期から始まった日本帝国主義の体制的危機の根底性
Ⅴ　〈帝国主義戦争と社会主義革命〉の本格的接近
a　帝国主義戦争の本格的準備に着手した大平政権と「総合安全保障」戦略
b　日米安保体制の再編強化―米・日・韓軍事一体化と、朝鮮人民の南北自主統一・反米反日朴打倒の闘い
c　ブルジョア階級独裁の反動化と社会帝国主義者の再編・忠勤人民闘争の持続的拡大と〈帝国主義と社会主義〉への分裂
d　諸潮流・諸政治勢力の分化・再編の激化――修正主義への転落か、急進民主主義の固定化か、プロ独・社会主義革命への前進か
e　反ソ反米反覇権国際人民闘争の大方向と日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命の政治路線を結合し、「正規の攻囲」を組織せよ
Ⅵ　日本革命と国際人民闘争の大方向を結合しなければならない
a　〈戦争と革命〉に対する態度を整え、ブルジョア階級の帝国主義戦争準備に社会主義革命の準備で応えよ
b　〈国家と革命〉に対する態度を整え、マルクス・レーニン主義党創建―社会主義労働運動創出をもってプロレタリア階級独裁を準備せよ
c　全ての人民闘争の指導者として登場し、社会主義統一戦線を形成せよ

第三部　党建設
Ⅰ　マルクス・レーニン主義の単一党建設へ、新たな長征に出発せよ
a　ブンドの分派から統合の時代を、自力更生と統合をもって更に推し進めよ
b　党建設の一般原則
c　マルクス・レーニン主義の第三次ブンドを結成せよ
d　宣伝・煽動・組織化と全国政治新聞
e　党の型――職業革命家を中核として、工場細胞を基礎とする中央集権制
Ⅱ　諸潮流の分化・再編に分け入り、大胆に党派論戦を組織せよ
a　ブンドの総括論争とマルクス・レーニン主義党創建
b　国際共産主義運動の分裂に規定された政治勢力の分化

序　旧共産同游撃派と旧共産同マルクス・レーニン主義派はどこから来て何を闘いとったか

労働者諸君、農民・学生諸君！

ブンドの急進民主主義を清算し、マルクス・レーニン主義の第三次ブンドの結成に向けた中核・先鋒隊が戦取された。共産主義者同盟游撃派と共産主義者同盟マルクス・レーニン主義派は、ブンドに対する無総括主義・清算主義に反対し、批判し、ブンド総括をやりきり、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想＝反帝反社帝のプロレタリア革命路線を確立し、もって共産主義者同盟（革命の旗）第一回大会を開催し、綱領・規約を採択し、政治報告を採択し、組織統合し、共産主義者同盟（革命の旗）を戦取した。かくてマルクス・レーニン主義の第三次ブンド結成に向けた闘いは、第二段階に突入した。

六九年七・六事件を契機として第二次ブンドは、急進民主主義のテロリズムと経済主義に引き裂かれ大分派闘争の時代に突入した。しかし、この分裂は七二年連合赤軍事件等をテコに、七四～五年からマルクス・レーニン主義と急進民主主義の分裂・対立へと質的に転化した。つまり、ブンドのマルクス・レーニン主義的側面が成長・発展し、様々なマルクス・レーニン主義分派が各々の地点で急進民主主義との闘争を通じて結成を闘い取っていったのである。

七八年から本年にかけて国際的には、史上三度目の戦争と革命の時代輪郭が明らかになり、第三次帝国主義戦争の第一段階が始まり、国際共産主義運動も一大転換＝分化・再編へ突入し、国内的には〈反動と戦争〉の要素が共に増大し、こうした国際―国内情勢に押し上げられブンドのマルクス・レーニン主義分派の統合問題が急速に煮つまった。

様々なマルクス・レーニン主義分派の結成は、マルクス・レーニン主義の第三次ブンド結成に向けた闘いの一段階であった。かかる分派を統合することが第二段階であり、まさに、この時期、各分派は第二段階へ飛躍することを問われたのである。游撃派、マルクス・レーニン主義派、紅旗派、労共委は、各々「統合の六条件」を提起した。しかし、紅旗派はブンドに対する清算主義（反スタ・トロツキズム）を残存させ、労共委がブンドに対する清算主義を残存させていた。と同時に、こうした誤りに固執し、統合に踏み出すことをちゅうちょした。これに対し、游撃派とマルクス・レーニン主義派は、日本階級闘争の全局・大方向、日本共産主義運動の核心問題をつかんで離さず、断乎として組織統合を決意し、実行したのである。こうして第二段階のささやかではあるが重大な第一歩が踏み出されたのである。

七四年八月游撃派は、旧再建委の「革命的止揚」を通じ、他方七五年二月マルクス・レーニン主義派が旧プロ革派との党内―分派闘争を通じ、各々の結成が闘いとられ、別々の地点からマルクス・レーニン主義の第三次ブンド結成の道を踏み出したのである。

游撃派は、一全総・二全総の組織化の中で、長崎前衛党における綱領・組織の欠如を暴き出し、「党の技術主義」と「盟約」としての個的共同体的ブンド」を根底的に対象化し、批判し、「党建設における組織思想の内実」を獲得する理論的営為を推し進め、原則的資本主義批判において「労働手段すなわち生活源泉の領有者に対する労働者の経済的隷従が、あらゆる形の隷属、あらゆる社会的悲惨・精神的退廃および、政治的隷属の基底に横たわっている」という第一インター規約前文の見地を復権し、またプロレタリア階級と革命党について「党と階級の二元主義的固定化」を批判、総括し、「有産階級の団結せる力に対する闘争において、プロレタリアートが階級として立ち現われることができるのは、プロレタリアートが有産階級の手で作られた従来のあらゆる政党に対立する特別な政党を自らの手で構成する場合だけである。政党へのプロレタリアートの団結は、社会革命とその窮極の目的の勝利―階級の廃止―を確実なものとするための必要・不可欠なことがらである。」というマルクス・レーニン主義の見地・立場を築き上げた。つまり、一全総、二全総の中で游撃派は、マルクス・レーニン主義分派として自己を思想・政治・組織的に打ち固め、純化する、と同時に、ブンドの階級形成主義を総括し、ブンド総括の前進を闘い取ったのである。

しかし、一全総、二全総は、急進民主主義の資本主義批判を基本的に清算しつつも急進民主主義のブルジョア国家批判を残存させており、従って〈国家と革命〉の問題に対する実際の態度では、ブルジョア国家権力の打倒を日帝の対外政策に対する闘争、即ちその政策主体である政府に対する闘争に切り縮め、プロレタリア階級の階級闘争をプロ独・社会主義革命へ高め、組織していくことが放棄されていたし、また政治路線、特に国内路線において米帝追放の任務を全く欠落させていた。更には、反スタ・トロツキズム批判、毛沢東思想支持をあいまいにしていた。こうした諸点での弱点をもっていた。　故にブンド総括も部分的なものに止まっていた。三全総を経、「党の転換」を通じた四全総の組織化こそ、こうした諸弱点をえぐり出し、総括し、全面的にマルクス・レーニン主義・毛沢東思想＝反帝反社帝のプロレタリア革命路線を獲得する過程であった。

七七年の部落解放闘争における党的敗北の中で游撃派は「三全総以降の反帝戦略主義批判の不徹底性・不充分性」を容赦なく切開し、えぐり出し、これを「反スタ・トロツキズム・急進民主主義の清算と〝党の転換〟の闘い」と位置づけ、路線の全面的再構築へ立ち向っていった。第一に、三全総において提起された〈総蜂起路線〉を「資本主義批判の基本的眼目が正しくすえられていない。」「帝国主義の結果としての侵略反革命（戦争）や、排外主義に対置される『プロレタリアートの独自性』であるならば、……急進民主主義に転落する以外にない」と総括し、その根定にある急進民主主義のブルジョア国家批判を清算し、マルクス・レニーン主義のブルジョア国家批判にとってかえ、もって日本の国家権力の問題と日本革命の性質を具体的に分析することによって「米帝追放のスローガンを獲得し、　日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命の国内路線を確立した。第二に七七年十・一四反覇権集会の闘いの地平を防衛・発展させ、反スタ・トロツキズム批判、毛沢東思想支持をいよいよ鮮明にし、反帝反社帝の思装武装を促し、強め、革共同との分水領を一層深く引ききり、同時にまた「現代世界の基本特徴は、史上三度目の『戦争と革命の時代』に突入していることである。」との当面する国際情勢の認識を整え、米・ソ二大超大国の覇権主義、全ての覇権主義に反対する反ソ反米反覇権闘争を支持し、これと国内路線を結合する政治路線を確立した。第三に、CRFに象徴される急進民主主義の組織路線を総括し「中央集権非同法党建設を要とした組織方針を確立」し、旧来の「過程としての戦術」から「全階級戦線に神経系のように張りめぐらされた工場細胞建設をもって、武装蜂起・プロ独・社会主義革命の勝利に向け『正規の攻囲戦』に本格的に着手する」という「計画としての戦術」へ戦術を転換する、ど同時に、「地区党方式から工場細胞方式」へ党の型を転換した。第四に、第一から第三の転換は、ブンド総括と不可分に結びつき、党内討議・党派論戦をつうじブンド総括を深める中で闘い取られたのであり、かくてマルクス・レーニン主義の第三次ブンド結成の党建設路線が確立されたのである。

第一から第四までの一切が四全総へ注ぎ込まれ、刻み込まれ

ブンドの急進民主主義を清算し，マルクス・

ブンド系のマルクス・レーニン主義分派の統合に向けた主体的条件が形成され、仕上げられたのである。

マルクス・レーニン主義派は、七五年春に結成の経過、当面の任務、終局の目標を次のように明らかにした。

「我々は、一向＝西条フラクの職業革命家の組織の建設から引き継ぎ、マルクス・レーニン主義に立脚したプロレタリア革命路線の獲得、体系的非合法党創建を克ち取らなければならない。この偉大な事業は長く困難な道程をたどるだろう。しかし、我々は前進しなければならない。プロレタリア階級の経済的従属、賃金奴隷制からの解放に向けて」と。

マルクス・レーニン主義派の歩みは、この「偉大な事業」を階級闘争の鉄火の中で、苦闘の中で、少しづつ、確実に推し進めていく過程であった。

マルクス・レーニン主義派の前身である赤軍派「マルクス・レーニン主義」編集委員会第一回総会から同第二回総会＝マルクス・レーニル主義派第一回大会への時期は、連赤総括を基礎に六つのスローガンを軸に出発し、プルジョア階級独裁との闘い、社帝派との闘い、急進民主主義の塩見一派との党派闘争、党内闘争という「四重対峙戦」に耐え、貫き、党的個性を確立すべく、ブンド総括の基本的観点を整え、全勢力を綱領草案の獲得に注ぎ込む時期であった。

この中で、基本的に「急進民主主義の清算、マルクス・レーニン主義の獲得」に成功する、と同時に、党内の反スタ・トロッキズムを整風し、毛沢東思想支持、反スタ・トロッキズム批判の態度を明らかにし、一方ではプロ革派の急進民主主義を通じた毛沢東思想の受容を、他方では毛沢東思想と反スタ・トロッキズムの折中主義を批判し、思想・政治路線の深化を闘い取っていった。更には、党内の一部にあったブンドに対する清算主義も整風し、ブンドの急進民主主義を清算し、マルクス・レーニン主義の第三次ブンドを結成しようという党建設路線が闘い取られた。

七七年二月マルクス・レーニン主義派第一回大会は、綱領草案・規約を満場一致で採択すると同時に、「名称の変更に関する決議」を可決した。

第二回大会に至る中でマルクス・レーニン主義派は、綱領草案を武器に一方では政治暴露・煽動・組織化を一定工業化し、革命的党活動の方法・形態の確立をめざし、他方では〈国家と革命〉〈戦争と革命〉の問題をめぐりブンド系諸派との論争を目的意識的に組織し、もって本格的に建党闘争に着手していった。こうして、労働者・勤労人民との結合と論戦を深め、路線と組織を鍛え、訓練し、マルクス・レーニン主義の第三次ブンドの思想・政治路線、当面の国際・国内情勢認識を整え、確立していった。

七八年八月第二回大会は、かかる成果を打ち固めつつ、綱領草案を三点にわたり改正し、ブルジョア階級独裁の反動化を、即ファシズムと見る急進民主主義の「なし崩し（天皇制）ファシズム論」的傾向を清算し、このことと結びつけて政治報告の中で、ブルジョア議会制民主主義の下での議会主義としてプロレタリア階級を支配し、ブルジョア階級独裁を支え、執行している修正主義、現代修正主義・社帝に対する批判を強め、プロレタリア階級をマルクス・レーニン主義党に組織し、社会主義統一戦線を結成し、革命戦争・武装蜂起を目指す「計画としての戦術」を大胆に打ち出した。

第二回大会の成果をもってマルクス・レーニン主義派は、七八年三・二六三里塚闘争以降の日本階級闘争の歴史的転換を見据え、プロレタリア階級を政治舞台の前面へ押し上げるために自力更生の党建設を促し強める、と同時に、当時の〈共産主義と労働運動の結合〉の問題をめぐるブンド系の論争にわけいり一方ではプロ独・社会主義革命の宣伝・煽動を欠落させ、プロレタリア階級の階級闘争を民主主義闘争・経済闘争に限定する傾向を批判し、他方ではコミンテルン第七回大会の「労働者統一戦線」に解消する傾向を批判し、もって組織路線の転換を一層おし進め、職業革命家を中核とし、工場細胞を基層とする組織路線を確立した。

七五年から七九年の建党運動の試練の中でマルクス・レーニン主義派は、マルクス・レーニン主義の第三次ブンド結成に向けた思想・政治路線を練り上げ、鍛え、「統合の六つのスローガン」に絞りこんだのである。

游撃派とマルクス・レーニン主義派の党建設の苦闘の全成果・全内容は、各々の「統合の六つのスローガン」に刻みこまれている。

両派は「統合の六つのスローガン」即ち、①ブンドの急進民主主義を清算し、マルクス・レーニン主義の第三次ブンドの結成、②急進民主主義の清算、マルクス・レーニン主義の獲得。反スタ・トロッキズム批判、毛沢東思想支持、③反ソ反米反覇権の国際路線と日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命を結合し、推進する、④当面する国際―国内情勢を史上三度目の《戦争と革命の時代》との認識にたち、⑤プロ独・社会主義革命を宣伝・煽動し、民主主義闘争・経済闘争に注ぎこみ、プロレタリア階級を党に組織し、社会主義統一戦線を結成し、革命戦争・武装蜂起を目指す「計画としての戦術」、⑥職業革命家の組織を中核とし、工場細胞を基礎とする中央集権主義の党建設での一致を基礎に、綱領全体、革命的党活動全体の厳格な一致を目指し、逐にこの問題での一致を闘い取り、共産主義者同盟（革命の旗）第一回大会を開催し、綱領・規約の採択について、今、更に政治報告を採択することによって組織統合し、共産主義者同盟（革命の旗）の結成を戦取したのである。

（四面へつづく）

日本共産主義運動の転換に応え、攻勢的党建設に出撃し、社会主義と労働運動の結合をめざす

10・8 共産同政治集会へ総決起せよ！

共産主義者同盟（革命の旗）中央委員会

読者諸君！同志諸君！

わが中央委員会と固く団結し、十・八共産主義者同盟（革命の旗）政治集会を全力・総力で準備し、組織せよ！

共産主義者同盟（革命の旗）の結成・登場は、全国の共産主義者・革命的労働者、革命的農民・学生の嵐のような拍手、熱烈な期待の中で、迎えられた。結成から一ケ月たった現在、一層の期待がわれわれに寄せられている。

われわれの責任は重大である①結成の地歩を打ち固め②ブント潮流のいっさいの混乱と動揺に終止符をうち、マルクス・レーニン主義のもとに統制し、一層緊密に結集し、組織的に統一するという任務③実践活動に従事しているすべての共産主義者を統合して、彼らの活動を深め、広げるためにあらゆる努力を傾ける。と同時に④われわれが日共や革共同と対決しなければならなかった真の意義を労働者、農民、学生のできるだけ広範な大衆に鮮明に提起するという任務が力強く要請されているのである。

今や、われわれは攻勢的党建設に打って出ねばならない。マルクス・レーニン主義の第二段階の条件を一層整え、修正主義・現代修正主義、急進民主主義に対抗し、昨年三・二六三里塚闘争を頂点とし戦取された革命的高揚を第一歩から第二歩へと推し進めねばならない。「暴力革命で日本帝国主義、つまりブルジョア階級独裁を打倒すると同時に、米帝国主義を追放し、プロレタリア階級独裁を樹立し、資本主義的生産関係を社会主義的生産関係にとってかえること」（綱領草案）に向けてわれわれは、怒涛の進撃を開始しなければならない。十・八政治集会を突破口とし全国的な攻勢的党建設に進撃せよ！

わが路線の下に固く団結せよ！

十・八共産主義者同盟（革命の旗）政治集会の第一の意義は、第二次ブンドの栄光と党的敗北を経験し、その全面的総括をつうじて形成・確立されたわが綱領草案・規約と戦術・組織を打ち固め、全国の共産主義者・戦闘的労働者、戦闘的農民・学生のものとしていくことにある。

われわれの思想路線は「急進民主主義を清算し、マルクス・レーニン主義の獲得」、「反スタ・トロツキズム批判、毛沢東思想支持」である。つまり、①プロレタリア階級独裁を要に、社会主義と労働運動を結合し、プロレタリア階級をすべてのブルジョア政党に対立する独自な政党に組織し、暴力革命でブルジョア国家権力を粉砕してプロレタリア階級独裁を実現し、資本主義を廃止して社会主義を建設すること、プロレタリア階級の階級闘争をこの実現へと組織し、指導すること、②社会主義継続革命、一国社会主義建設、植民地従属国の革命における二段階戦略の承認である。

政治路線は、反ソ反米反覇権の国際人民闘争の大方向を支持し、これと日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命の国内路線を結びつけ、推進する路線である。つまり、①ソ連を口先では「社会主義」、実際での帝国主義と批判し、アジアの社会主義国、民族解放闘争の反ソを重視した反ソ反米反覇権を支持し、②これと、日本プロレタリア階級を革命党へ組織し、「プロレタリア階級の指導を通じ、貧農＝半プロレタリアと同盟し、中農と都市小ブルジョア階級を引きつけて、社会主義統一戦線を結成し、暴力革命で日本帝国主義を打倒し、米帝国主義を追放し、プロレタリア階級独裁を樹立し、社会主義革命を遂行する」という党建設路線が闘い取られた。

攻勢的党建設に出撃せよ！

第二の意義は、日本共産主義運動の歴史的転換にわけいり、マルクス・レーニン主義の第三次ブント結成の第一歩を刻印することにある。

今日、日本共産主義運動は、日帝の体制的危機と結びついた〈反動と革命の要素〉の増大、社会主義革命に向けた革命情勢の端緒的始まりの中で、政治路線をめぐり、分化・再編が進行している。〈戦争と革命〉〈国家と革命〉の問題をめぐりマルクス・レーニン主義、修正主義・現代修正主義、急進民主主義が厳しく問われている。ブンド潮流も例外ではない。

かかる分化・再編にわれわれは、ブント総括を要に攻勢的に立ち向い、この中で自力更生を基軸とし統合を副軸とする党建設を圧倒的に前進させ、主導権を掌握し、マルクス・レーニン主義の第三次ブンドを戦取せねばならない。

現在、反ソ連米擁帝派と反米連ソ擁帝派に修正主義、現代修正主義・社会帝国主義は、大きく二分化しつつある。「毛沢東思想派」は、①王明の道＝右翼投降主義、②トロッキズム、③マルクス・レーニン主義に三分解している。革共同潮流は革マルが反ソ連米擁帝に純化する中で、試練にたたされている。第四インターは、プロレタリア階級独裁を放棄し、社・共をプロレタリア階級の当面の指導部と認め、議会主義の下に先進的労働者を再び、三度縛りつけようとし、これと国際路線の連ソ反中と結びつけ、ソ連社帝の覇権主義の別動隊となり、プロレタリア階級、勤労人民の隊列を革命的方向へ導き、打ち鍛えるのではなく、民主主義へ押し止め、ブルジョア階級独裁に追随させ、遂にはソ連社帝に売りわたそうとしている。中核派は、ソ・米第三次世界大戦の不可避性を見ず、空疎な日・米決戦論を主張し、これと先制的内戦戦略を結合させ「侵略を内乱へ」を戦略スローガンにしているが、実際上、日米安保粉砕闘争から召還し、ブルジョア階級の日米安保体制の再編・強化をテコにした戦争策動を許し、日帝の戦争と反動攻撃に対する真の、首尾一貫した革命的反対者になりえない。

ブンド潮流は、①マルクス・レーニン主義②急進民主主義に大きく二分化している。ブンドの急進民主主義分派の多くは、ブンドに対する無総括主義がある。ブンドのマルクス・レーニン主義分派には、部分的にブントに対する清算主義がある。

こうして革命的祖国敗北主義を貫き日帝打倒・プロ追放・プロ独・社会主義革命を目指すマルクス・レーニン主義と、祖国擁護主義の反ソ、あるいは反米民族解放を目指す修正主義・現代修正主義、この中間で動揺する急進民主主義へと日本共産主義運動は、分化の中で再編へ向っている。

われわれは、修正主義、現代修正主義・社会帝国主義を踏みしだき、紅旗派のブンドに対する清算主義、反スタ・トロッキズムの残滓を整風し、怒濤派のブンドに対する清算主義、「全千島奪還論」なるブルジョア民族主義への傾斜を整風する、と同時に動揺する急進民主主義派、特にブンドの急進民主主義諸派を教育・改造しマルクス・レーニン主義の第三次ブンド結成の条件を整え、戦取し、日本共産主義運動の中核、プロレタリア階級の真の指導者へと自己を鍛え、成長せねばならない。

第三の意義は、革命的党活動を確立し、職業革命家の組織を中核とし工場組胞を基礎とした、中央集権主義党建設の飛躍台とすることである。

われわれは、綱領の転換から、戦術・組織の転換へ進んだ。この転換を徹底的に強め、押し拡げ、貫かねばならない。もって革命的労働者を獲得し、組織し、プロレタリアの多数の支持を得、工場を革命の砦へ転化していかねばならない。それには、「革命の旗」を軸にした社会主義の宣伝・煽動を一層強化し、民主主義闘争、経済闘争に注ぎこみ、党に対する指導の中央集権化と責任の分散化を促し工場組胞建設を推し進めねばならない。十・八政治集会をかかる自力更生の党建設と固く結びつけ、結節点とし、社会主義と労働運動の結合の新たな出発、飛躍台とせねばならない。

10・8 政治集会へ！

読者諸君・同志諸君！

わが中央委員会と固く団結し、日本共産主義運動の歴史的転換、日本階級闘争の指導の質の転換に対し、①わが路線とプロレタリア階級・勤労人民の大胆な結合、②マルクス・レーニン主義の第三次ブンド結成の橋頭堡の構築、③革命的党活動の確立でもって攻勢的党建設に進撃せよ！ 全力・総力で十・八政治集会を準備し、組織し、組織せよ！

全国の共産主義者・戦闘的労働者諸君！戦闘的農民・学生諸君！ 十・八共産主義者同盟（革命の旗）政治集会へ結集せよ！

てかえ，反スタトロツキズムを批判し，毛沢東思想支持

第一章　ブンド総括の今日的意義と総括観点

a　はじめに　（略）

b　清算主義と無総括主義に反対する

われわれは、かつてのブント総括上の論争を、国家と革命の問題、戦争と革命の問題での論争から、更に革命党の戦術・組織の問題にまで押し拡げ、統合のための六条件を相互に提起することを通して、統合のためには今、何が必要なのかを明らかにし、広々とした統合のための論争の舞台を形成した。この六条件は、両派が統合に成功した段階において更に煮つめあげられたものになったが、基本的態度・観点はいささかの変更もない。それはブントの総括論争の全歴史を対象化したものとして、今大会で採択された綱領草案・規約とともに重要な位置を占めている。まさにブントの総括は、今日のわれわれの到達地平からのなで切り的批判ではなくして、歴史性を含めた上でのものでなければ、静止したものになり、今日の党建設に生かし切れるものではない。

われわれは、この総括を正反両面で正しく組織し、継承すべきものは継承し、清算すべきものは一切の躊躇なく清算するという態度を堅持した。とりわけ、第一次、第二次ブントがめざした政治がどのようなものであり、それがどのような弱点によって貫かれえなかったのかを、共産主義者同盟が、階級闘争の前進に寄与し、そうであるが故に真に深い敗北を経験するに至ったという現実を見すえていくことと結びつけてとらえ返すことに他ならない。

まず、第一次、第二次ブントを通じての、その積極的な意義の第一は、ブントが現代修正主義に転落した日共との分岐・訣別をもって革命党建設の途に着いたように、常に日和見主義・改良主義との闘争を推し進めたこと。そして、特にプロレタリア階級独裁の観点を復権したように、端緒的ではあれ反帝闘争と反修闘争の結びつきをもっていたことである。第二にハンガリー動乱によって触発された革共同の「人間解放の論理」ではなく、階級闘争の現実に根ざしつつ、その実践のなかでマルクス・レーニン主義の復権を行なおうとし、階級闘争を組織し、前進させるなかで自らの革命的世界観を打ち立てようとしたことである。第三には、新たな世界認識を形成したことである。それは、反帝民族解放闘争の新たな高揚を、戦後帝国主義世界体制の動揺との関連でとらえ、世界革命のなかに位置づけ、帝国主義本国階級闘争を民族解放闘争への連帯としてとらえ、反帝国際主義の基調を明らかにしたことである。そして、民族解放闘争から社会主義革命への方途を明らかにし、更には国家権力と諸階級相互の関係をつかみ出し、現実の革命闘争に立脚して世界革命の動因を、三ブロックの革命勢力の結合として提示したことである。まさにこれこそ、第一次、第二次ブントを貫くブントのマルクス・レーニン主義の要素であり、これをより拡大・発展させ、その部分性を正しく総括し、全体化・豊富化しなければならない。まさに、われわれの闘いとはこのブントの急進民主主義、反スタ・トロツキズムを大胆に清算し、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想のプロレタリア革命路線を打ちたてることによって、党建設に勝利していくことである。両派の統合の闘いの勝利こそ、この事業の着手に他ならない。

今日、ブントの革命的伝統を投げすて、基底環元的に現在の到達地平の高みからなで切りし、ブントを清算することを代償に修正主義へ転落していった国際主義派や塩見などや、他方ブントの敗北の深さを把握できずに七回大会を墨守し、無総括主義で〝栄光〟の復活を夢見ている反スタ・トロツキズムの諸君の失敗を充分に教訓化して、われわれの態度を明らかにしよう。

第二章　第一次ブンドの路線の総括　（略）

第三章　第二次ブンドの路線と党的敗北の総括

第二次ブンドは、第一次ブンドの国際路線の限界の突破を革命闘争の現実の実践の中で獲得してきた。特に革共同のアジアの社会主義国・民族解放闘争への敵対に抗して、ベトナム革命戦争勝利、安保―NATO粉砕を掲げて、米帝の侵略反革命戦争とそれに加担しながら世界再分割―侵略反革命に進み出した日帝に対する反戦反帝闘争として闘い、反帝国際主義の内容を鮮明に突き出した。

七回大会報告は「任務」で「世界同時革命の達成を先進国、後進国、労働者国家の階級闘争の三つの有機的結合をもって同時に追求する方針が、我々の世界革命の基本方針であり、日本革命もこの国際階級闘争の任務の一環として闘い抜かねばならない」と過渡期世界の三ブロック革命の結合を提起した。この国際路線は、アジアの社会主義国、民族解放闘争と結合して、日本のプロレタリア階級独裁・社会主義革命を推進せんとするものであり、この革命性は継承されなければならない。第二次ブントは、このように基本的には階級闘争の前進に寄与しうる観点を打ち出したのであるが、第一次ブントの弱点を全的に克服するものとはなりえず、部分的に残存させ、自らが推し進めた階級闘争の前進の中で、逆にそれを拡大する要素をもっていた。われわれはそれをえぐり出さなければならない。

第二次ブンドのえぐり出すべき弱点

第二次ブンドは、プロレタリア国際主義を「三ブロック階級闘争を世界同時革命として結合すること」において、その基本的任務を五つのスローガンとして提起している。一、帝国主義打倒・世界革命をめざすプロレタリア独裁の樹立！　二、帝国主義政府の侵略と抑圧と反革命粉砕！　三、民族解放・社会主義革命！　四、労働者国家人民への一切の反革命粉砕！　五、世界革命を放棄し、プロ独をさん奪する労働者国家の党官僚打倒！がそれである。

ここでは、以下の点を問題にし、総括しなければならない。その第一は、今日もまだ論争が継続している世界同時革命の問題である。第二次ブンドの世界同時革命の主張は、次の三点によって基礎づけられている。①帝国主義の危機の深化は、不均等発展によって世界的＝同時的であり、現代過渡期世界では、中ソに対する政治的軍事的同盟の下での、後進国への侵略と対立の激化として進行するが、他方帝国主義の世界支配がベトナム解放闘争によって突き破られることによって、危機の発現が同時的たらざるをえない。②社会主義への移行は、唯一世界的＝同時的にのみ可能であり、従って「労働者国家の階級闘争」も、「民族解放・社会主義革命」も、世界同時革命への永続性としてあり、帝国主義の世界再分割―侵略・抑圧・反革命と衝突して階級危機を迎えざるをえない。③帝国主義の打倒も、世界的＝同時的打倒を追求してこそ初めて可能となり、この帝国主義の世界的＝同時的打倒こそ、最も重要な環である、としている。この主張は、後に、三ブロック階級闘争を世界同時革命として単一に統合する要は世界プロ独であり、世界プロ独を組織する闘いとして、帝国主義の侵略反革命と国際的人民戦線派（もしくは社会帝国主義の武装反革命）に対峙し、各国の権力闘争を闘わねばならないと、「発展」させられた。これは、今日まで多くのブンド系の諸君の中に引き継がれている。そうした諸君は、〈帝国主義と世界プロレタリア共産主義革命の時代〉の権力問題＝世界プロ独とし、そうすることによって、世界革命の異った発展段階・異った時代を直接に現在にあてはめるか、各国の権力問題を事実上昇天させてしまうのである。しかし、現代は依然として、二十世紀初頭に始まり、ロシア十月革命で公然のものとなった〈帝国主義と世界プロレタリア共産主義革命の時代〉であり、この時代は、四つの基本矛盾の作用の下での三ブロック革命の勝利・結合としてしかありえない。すなわち、帝国主義では、ブルジョア階級独裁―自国帝国主義の打倒を基本とするプロ独・社会主義革命の実行であり、植民地従属国では、民族民主主義革命から社会主義革命へ進む二段階の連続革命であり、社会主義国では、プロ独と継続革命を堅持して、現在も依然としてそうである。

第二次ブンドの世界同時革命＝世界プロ独、その直接的実現を担うものとしての各国の権力闘争という提起は、①一国社会主義不可能論に基き、又現代修正主義の起源を一国社会主義建設そのものに求めることから、レーニンの「社会主義革命の勝利は、はじめは数カ国もしくは一国ででも可能である」の否定にまで導くことによって基礎づけられており、②帝国主義の打倒をプロ独・社会主義革命としてではなく、侵略・抑圧・反革命粉砕、すなわち対外政治との闘争にのみ狭められ、一面化され、だから資本主義的生産関係を廃止して社会主義にとってかえることではなく、帝国主義がもたらす国際関係―諸民族・諸国家の相互関係の変革に一面化され、それを実現するものとして世界革命が展望されていること（ここから国際階級闘争の環が、帝国主義の侵略・抑圧・反革命との対決であるという、革命に並列された第二スローガンに示されている指針が導かれている）。③従って、各国革命を世界革命の有機的一構成部分として見るのではなく、各国革命＝世界革命、世界革命の場所的実現としてみなされているのであり、④だから当面する各国の任務と性質を、その国の国家と社会の性質に基いて明らかにするのではなく、「世界革命の未来からの逆規定」づけんとするものであり、⑤とくに、日本革命における米帝追放の任務を正しく位置づけられないことによって、それを直接に世界革命の実現をなす米帝打倒の闘いと規定することによっているのである。ここに、反スタ・トロツキズムの今日的な影響が急進民主主義と分かち難く結びついて現われているといわねばならない。（又こういうことから、「三つの世界論」や社会主義国の国家外交に対する全く的はずれな批判や評価も生み出されている。）現代を直接に「世界プロ独をめぐる世界プロレタリア共産主義革命の時代」と規定している紅旗派の混迷の根拠もここにある。

第二に、民族解放闘争についてである。これは疑いもなく、第一次ブンドに対する第二次ブンドの発展と前進であった。「後進国革命は、社会主義革命の性格を持つと同時に、帝国主義の侵略反革命と対決して民族解放をかちとる国際階級闘争の性格をもっている。従って後進国革命は、帝国主義心臓部の階級闘争と同時に結合した国際階級闘争として闘わなければ、勝利的結着を得られない性格としてある。」として「民族解放・社会主義革命」を提起している。それは、民族民主主義革命から社会主義革命への連続性と段階性と把握しきれずに、民族解放闘争そのものの性格を社会主義革命とイコールに把握した側面はあったとしても、今日のわれわれの到達点への道を拓いたものとしてあった。だが、他ならぬこの段階性と連続性の把握の欠如が、すでに述べた世界同時革命の主張の基礎にはらまれている諸観点と結びつくことによって、植民地従属国の革命は、帝国主義の世界的同時的打倒―社会主義への世界的同時的移行の決定者となる先進国革命と結合することなしには、社会主義建設へ前進し、勝利していくことはできないという、「先進国革命主義」の偏向、すなわち、先進国革命に植民地従属国の革命を従属させていく偏向が生み出されている。

第三に、社会主義継続革命とソ連論についてである。第二次ブンドは、中国とソ連を同一視して「労働者国家」と規定しており、非資本主義社会（過渡期社会　）と社会の性質を規定して、「帝国主義の包囲下でプロレタリアが権力を握った過渡期社会は、一定期間国家を形成せざるをえない。従って、労働者国家は、旧社会の母斑と帝国主義の包囲のために『世界革命後の過渡期世界のあるべき規準』から見れば、常に歪められざるをえない」として、労働者国家を歪めている党官僚の打倒を呼びかける。ここでは、何よりも、ソ連及び中国を、一国社会主義建設による世界革命の放棄としての修正主義としていること、

急進民主主義を清算し，マルクス・レーニン主義にとっ

そして「労働者国家」＝非資本主義群としてとらえ、社会主義でもなければ資本主義でもないという、党官僚の支配する第三の範疇としていることを指摘しなければならない。つまり、ソ連において資本主義的要素の残存と復活の中で、プロ独と社会主義継続革命を放棄した現代修正主義が党と国家の大権を奪い取ることによって、ブルジョア階級独裁にとってかわり、資本主義が全面的に復活したこと、この「党官僚」とは他ならぬ新たなブルジョア階級であり、しかも官僚独占ブルジョア階級であること、従ってソ連が社会帝国主義に転落したことを見ていないのである。第一次ブンドの段階では、フルシチョフの登場から時を経ていず、ハンガリー動乱からその変化を見出すという段階であったが、第二次ブンドにとっては、中ソ論争・中国プロ文革・ソ連のチェコ侵略の根拠を明らかにすることによって明確に出来る条件は生み出されていた。この社会帝国主義に対する無理解は、政治的にはソ社帝を美化し、「帝国主義に対する日和見主義」として、とみに覇権主義を強めるソ社帝を尻押しする結果に導いていく。これは、現代修正主義の根拠をプロレタリア階級独裁と社会主義継続革命の放棄に求めるのではなく、一国社会主義建設に求めることと不可分に結びついており、従って中国プロ文革に対しても、この階級闘争が何をめぐる階級闘争であるかをつかむことができずに、対外路線―帝国主義に対する戦闘性と反官僚闘争として評価する一面性を持たずにはおかなかった。そしてこのことは日本革命においても、日帝打倒を主張しつつも、革命の政治目的・性質と任務、つまりプロレタリア階級独裁を樹立して社会主義革命を実行することをあいまいにし、それを直接に世界革命に、更には世界プロ独に解消するものとして現われざるをえなかった。その意味では、プロレタリア階級独裁・社会主義革命の口先での承認、実際での放棄になっている。

この点での理論的かつ実践的突破は、今日のブンド総括の一根本問題であり、七回大会を墨守したり、無総括の諸君は、この観点にしがみつき、マルクス・レーニン主義の側面さえ投げ捨てて、反スタ・トロツキズムの温存・助長に力を貸し、また急進民主主義を一層固定化せざるをえないのである。

帝国主義批判・権力問題に対する急進民主主義と「過程としての戦術」

七回大会報告は、「情勢」で第三章・帝国主義の侵略反革命に抗し、国際階級危機を世界革命に転化せよ！を提起している。だが、この戦略スローガンに示されているところに第二次ブンドの急進民主主義政治が体現されている。つまり、日帝の対外路線、軍事外交路線の暴露に重的を置き、帝国主義を対外政策の体系としてみることによって、日帝の侵略反革命阻止を実力闘争として闘うこと＝権力闘争と訴えているのである。

それは、三ブロックの階級闘争を結び、当面の環をベトナム反戦闘争として「七〇年安保を国際反帝闘争の一大決戦として闘い、プロレタリア革命と世界革命の展望を切り拓くのである」と提起して、当面の反米帝の国際闘争と「日帝打倒・安保粉砕」の国際路線の結合による「世界同時革命の意識的追求としての日本革命」をめざした。

これは、アジアの社会主義国・民族解放闘争を支持し、これと日帝打倒・社会主義革命路線の結合をおしはかり、その結び目として反米帝の問題をとらえこまんとするものであり、第一次ブンドからの前進を示すものであったが、ここでも第一次ブンドの弱点を全的に克服するものになりえず、階級闘争の前進の中で一層拡大する要素をもっていた。

それ故、帝国主義を侵略反革命の対外政策の体制とみなして、それを実力で打ち破ることを、すなわち、権力闘争とする、帝国主義批判と権力問題に対する急進民主主義に端的に刻印されている。（従ってその闘争の最高目標は、「政策の主体、政策の執行機関としての政府」打倒とならざるをえない）そしてこの限りにおいて、米帝の問題を「権力問題の一環」にとらえこまんとしたのであり、このことが「世界同時革命」と結びついて、日・米の侵略反革命の軍事―外交政策の体制＝日米軍事同盟粉砕から、日米帝同時打倒＝世界同時革命の場所的実現というように歪められざるをえなかったのである。（これは後に、自国政府打倒・国際反革命軍＝安保軍粉砕や、日帝打倒・国際反革命軍事体系粉砕等、様々なバリエーションをもって主張されている）

だから、第二次ブンドの政治は、帝国主義の対外政治に対する闘争に重心を据えたが、政治の中でも最も本質的な、根本的なものである国家権力の問題そのものをとらえ、それを全中心に据え、他の一切をそれに結合・従属させるというものではなかったのである。それゆえ又、国際路線と国内路線を同一視し、相互に解消し、国際人民闘争の大方向と日本革命の政治路線の正しい統一・結合が闘いとれず、その国際主義を、超国際主義の空論へ、すなわち、単一の（性格の）世界革命戦争や、むしろ一国主義への水路をなす世界革命の場所的実現としての日本革命へと導いたのである。第二次ブンドは、このような志向に、侵略反革命と結びついた国内での反動と抑圧の強化＝「帝国主義的統括機構への全社会的再編」に対する闘いの組織化を結合させて、「日本全体を日米軍事同盟に反対する攻勢の波で埋め尽し」、三ブロック階級闘争の前面で安保粉砕闘争を押し拡げるとした。この点でも、対外政策に対する闘いと国内政治に対する闘いを、他ならぬ日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命をめざす闘い、プロレタリア階級独裁の準備へと結合・従属させ、指導し抜くことではなくて、民主主義闘争の戦闘的発展を目的化していることが示されている。すなわち、ブルジョア階級独裁をプロレタリア階級・被搾取大衆にとっての民主主義の否定に一面化し、その反動化との闘争、プロレタリア階級独裁をプロレタリア階級・被搾取大衆＝多数者の民主主義の実現に一面化し、後のなし崩しファシズム論に見られる如く、権力問題を不断に統治形態の問題に一面化する傾向を孕んでいたのである。

以上からして、第二次ブンドは、反帝と結びついた反修闘争も、反戦反帝闘争の左派性を競う戦術的分岐としてしか組織することができなかった。これは、七回大会の第一次ブンド総括の「党活動が大衆闘争内部における反帝国主義のヘゲモニーをますます拡大する」指導が欠落していたとする見地と不可分に結びついており、その後の「なし崩しファシズム論」に代表される戦術思想、つまり「反帝闘争」「反帝ヘゲモニー」の「戦略・戦術」として体系化されている。すなわち、経済闘争、民主主義闘争の戦闘化の延長上にプロ独・社会主義革命を展望し、この戦闘化を大衆闘争の自衛武装の発展として、「社会主義・共産主義の未来から現在をみる」立場でいろいろ意味付与し、民主主義闘争の暴力的抑圧を「なし崩しファシズム」とみ（「プロレタリア階級の階級闘争を現存の秩序内に抑圧し、賃金奴隷制に暴力的にしばりつけておくブルジョア階級の階級支配の機関・組織された暴力としてのブルジョア階級独裁」が露わとなることをファシズムとみることによって、逆にブルジョア民主主義を何か別のものとして美化することにつながっている）、この衝突が「ファシズムかプロ独か」へと到らざるをえないとする見地だったのである。そして社共を、「社共はこのような攻撃の前に無力な人民戦線派」と批判することによって、結局、社共に、経済闘争、民主主義闘争の戦闘化、そのための指導の優位性＝反政府闘争のヘゲモニー争奪でもって対決していたと言わねばならない。これは〈階級形成のヘゲモニーとしての党〉の「過程としての戦術」であり、社会主義と労働運動の分離である。これでは労働者階級を支配階級へと高めあげる、独自の政党に組織し、結集させる必要がなくなるのであり、労働者階級を首尾一貫してプロレタリア階級独裁へ準備させ、教育し、訓練していくことはできない。これを「計画としての戦術」にとってかえ、プロ独・社会主義革命の宣伝・煽動を労働者階級の中に持ちこみ、労働者階級の階級闘争の一切の現われを、プロ独・社会主義革命へ指導・統率し、社会主義と労働運動の結合をもって、労働者階級を組織し、革命戦争・武装蜂起をめざす「正規の攻囲」軍を組織しなければならない。

第二次ブンドの党的危機と八回大会から分派闘争へ

六十年代後半のベトナム反戦闘争と全共闘運動の高揚―政府打倒闘争への発展は、〈階級形成のヘゲモニーとしての党〉たる第二次ブンドに国際・国内路線の結合、戦術問題、党建設全体にわたる指導上の転換を突きつけるものとしてあった。

それは、六九年四・二八闘争で頂点に達したが、プロレタリア階級独裁に導いていく政治への転換ではなく、急進民主主義政治の拡大へと進むものとしてあった。つまりこの高揚の自然成長性に拝跪するのではなく、党の綱領―戦術―組織全体の転換が問われたのである。

第二次ブンドは、その転換を、八回大会で綱領委員会を設置することによって、「戦略・戦術の党」（六回大会）から「共産主義を組織する党」（八回大会）へとして、図らんとした。この全体を位置付けて、九回大会の報告は、七回大会を次のように総括している。「わが同盟は、職業革命家による上からの党建設路線をともに確定した。これはレーニン主義による『計画としての戦術』の革命論上の具体的復権―世界一国同時革命戦略の提起と共に、わが同盟の統一再建を名実ともに軌道にのせたのである。……だが、このことは同時に次の問題を内包するものである。第一にわれわれが戦略的観点からの闘争の組織化をはかろうとも、それ自身は階級形成―大衆闘争の党の任務を限定し、そこに従属せしめ、かえって単なる戦術主義への転落と同時に『党の組織』の空洞化―解体―潜在的分裂をはびこらせること。まさに『計画としての戦術』に反したような『過程としての戦術』が好むと好まざるとに同盟の基軸たらざるを得ないこと」であるとしている。たしかに指摘の正当性を認めつつも、このような諸傾向をどのような政治で克服するのかである。

だが九回大会においても解消も解決もしえなかったこの課題、そして、党解体の危機を、八回大会は、真正面から受け止めようとするのではなく、逆に未来社会の先取りから今日を逆規定して、それを党の意識性で突破せんとするものであった。たとえば、田原は、「共産主義者同盟の総括と綱領問題」のなかで「……一七年以降のロシア革命以降、まさにレーニンもいうごとく、これまでの綱領の主たる関心事としてきた『権力奪取』をめぐる問題と共に、いかに「社会主義を組織するか」という領域をまさしく綱領たらしめる領域として要請しているのである」としてブントの思想・政治路線の転換を素直に表明している。

この提起は、八回大会当時としては当然のこととして「労働者国家」規定や世界プロ独規定を根幹とするものであったが、問題はそのことにあったのではなく（それ自身の批判については既に明らかにしているのでここではくり返さない）、現実に抜き差しならないものとして突きつけられている急進民主主義政治からの転換・過程としての戦術からの転換とそれを基礎づける党の思想統合と組織性格の変革の課題に答えようとするものではなかった点にある。かえって逆に、急進民主主義政治をマルクス・レーニン主義政治へと転換せずに、「未来から現在を見る」という綱領思想そのものの誤りと様々な未来学を生み出すだけで、むしろ地上の階級闘争から昇天し、階級闘争の全体の要請を部分性に狭めてしまい、綱領―戦術―組織の全体を真に変革しえなかったという点にこそ、問題は存在するのである。

それゆえに、現実は、政府打倒を要求する反政府闘争の自然成長的昂揚に押し上げられて、次のような党内闘争として進展した。すなわち、一方は、武装蜂起―権力奪取へと突撃せんとしたが、労働者階級の経済的解放を実現する社会革命の遂行のために、ブルジョア国家権力の打倒・プロレタリア階級独裁の樹立をその政治目的とするものではなく、ファシズムの全面化を先制的に粉砕するという民主主義的憤激と革命的熱望を基礎とし、従って、社会主義革命の原動力たる労働者階級の階級闘争を組織し、それをプロレタリア階級独裁にまで拡張・発展させて社会主義革命を実現する闘いとして武装蜂起を遂行したのではなく、小ブルジョアの闘争に求めるテロリズムとなった。他方は、武装ソビエト運動（十党の軍事）を対置し、つまるところ、経済闘争・民主主義闘争の徹底化＝大衆実力闘争とその自衛武装に、党の軍事を結合させることによって、永続的に権力闘争へと高めるという運動過程論であり、世界プロ独を意識した党の軍事が大衆の側での民主主義の実現の要求を保証するという、権力問題を欠落させたものであり、その後ここからは、労働運動を強調しつつも、他ならぬ社会主義と労働運動を結合し、労働者階級をプロレタリア階級独裁にまで拡張・発展させることを眼目とするのではなく、経済闘争・民主主義闘争に狭める経済主義を生み出した。それぞれの現われは異っていても、社会主義と労働運動の分離・急進民主主義の同一の土俵の上で、一方の極に赤軍派があり、他方の極に再建委があった。そして、七・六事件を契機として分裂し、大分派時代に突入した。それは、ブンドが、「国家と革命」の問題に対する急進民主主義的態度によって、日帝打倒・社会主義革命を実現する戦術問題を正しくたてることができずに、経済闘争、民主主義闘争の戦闘化の延長上にプロ独・社会主義革命を展望するという「過程としての戦術」に根拠があったといわなければならない。

九回大会が客観主義的指摘にとどまらざるをえず、踏みこんで解決しえなかった問題も、急進民主主義政治にはまりこんだまま、露呈している否定面をみえるがままに指摘しているからにすぎない。

共産主義者同盟（革命の旗）

政治機関誌『長征』創刊号　発売せまる！

予約募集中、予価・六〇〇円

創刊号内容　共産同（革命の旗）第一回大会決定報告集　綱領草案・規約および政次報告全文掲載！――赤流社で取扱います。

全国二〇〇万学友諸君、共産主義者同盟（革命の旗）に注目する全ての友人達へ

共産主義者同盟（革命の旗）中央学生組織委員会

ブント十年の分派闘争に終止符を打ち、単一の戦闘指令部を！マルクス・レーニン主義の第三次ブントの創建を！というプロレタリア階級・勤労人民、先進的労生の希求に応え、ついに分派から統合の時代を切り拓く共産主義者同盟（革命の旗）が結成された。共産主義者同盟（革命の旗）はブントの「現代修正主義に転落した日本共産党から訣別し、トロツキズムの革共同に反対してきた」（綱領草案）革命的伝統を正しく継承し「日本プロレタリア階級のマルクス・レーニン主義党を創建し、プロレタリア階級の世界軍の一部隊として、全ての国々の共産主義者と共に、世界共産主義革命の勝利をめざして闘う。その途上にあって、日本革命、つまり、日本帝国主義打倒・米帝国主義追放・プロレタリア階級独裁・社会主義革命の実行を当面の任務とする」（同）。まさに共産主義者同盟（革命の旗）は、この試練と苦難に満ちた新たな闘いの光栄ある先鋒隊として自己を位置づけている。そのことは同時にブントの急進民主主義を清算しマルクス・レーニン主義を獲得し、《分派闘争の時代から統合へ》と転換するブントの新たな中核・先鋒隊ということでもあるのだ。

しかし、ひるがえって言えば、こうした学生運動の現状こそは、前述した「政治的グループ分けの反映」なのである。したがって、われわれは断乎として右翼ファスト勢力を粉砕し、修正主義・社会帝国主義を容赦なく批判し、闘い、急進民主主義、反スタ・トロツキズム諸派との思想闘争を通じて、マルクス・レーニン主義の単一党建設の一翼を担うべく共産同（革命の旗）と結びついた革命的学生運動の創出に着手していかねばならない。しかも、そのことの最大の武器は、同盟の思想・政治路線を綱領草案として定式化することを通じてすでにわがものとしているのだ。

急進民主主義の指導か マルクス・レーニン主義の指導か

この統合、新たな党建設の前進が今日の依然として分散、混迷の中で苦闘する先進的学生にとってどれほどに決定的位置と意義を有しているかは明らかである。かつて六〇年代後半から開始された学生運動の高揚が、史上三度目の戦争と革命の時代の開始と結びつきベトナム反戦闘争を突破口として七〇年安保大会戦に至る、日本階級闘争の牽引者であったことは紛れもない事実である。

それはレーニンが言うごとく、「（学生は）インテリゲンツィアの中でもっとも敏感な部分であり、またインテリゲンツィアがインテリゲンツィアと呼ばれるゆえんは彼らがだれよりも意識的に、だれよりも決定的に、だれよりも正確に、社会全体における階級利害と政治的グループ分けとの発展を反映し表現する点にあるからである」しかり、まさにそうしたものとして六八・六九年の全国学園闘争があり、七〇年安保大会戦をめぐる一大高揚の時期があったといえよう。

そのことは今日、いよいよ戦争と革命の嵐の時代の本格的到来が明らかとなる情勢下で学生運動をめぐって諸政治勢力、党派の分化と再編が理論的にも、実践的にもより先鋭な形態で進行し、「社会全体の階級利害と政治的グループ分け」がそうした仕方で開始されていることと結びついている。ではそのことはいかなる内容として今日的に進行しているのであろうかいうまでもなく、それは、マルクス・レーニン主義か、修正主義・急進民主主義か、さらには、プロレタリア階級独裁の全戦線における準備か、ブルジョア階級独裁の擁護か、さもなくば、それへの急進的反対派か、として一層厳格に問われているのだ。

学生運動の混迷・停滞から革命的再生へ！

今日の学生運動は、そのことを逆説的に混迷・停滞ということを通じて証明している。かつて六〇年代後半、一時的にではあれ、闘い取られていた学生の政治的権利（勿論それ自体としては民主的権利の範疇に属するものであるが）が、帝国主義の戦争と反動への熱望の高まりと軌を一にして解体され、大学と教育の帝国主義的再編の一層の暴力的進行の中で、それへの融合を果たし、ブルジョア階級独裁の擁護のため、先進的学生のレッドパージを「学園暴力一掃・学園の自由回復」として主張し実際に暴力的に敵対し続けているのはほかならぬ、現代修正主義の今日的には社会帝国主義として純化した日本共産党である。そしてこの社会帝国主義に指導された学生運動こそが今日的主流派を占めている。また旧来の急進民主主義反スタ・トロツキズムを思想・政済路線とする諸君は、政策に反対し、これを阻止し、この政策を実行する政府に反対し、これを打倒する民主主義闘争の戦闘化を即、帝国主義・ブルジョア国家権力の打倒―プロレタリア階級独裁・社会主義革命として展望する「過程としての戦術」であるがゆえに修正主義、社会帝国主義との分岐を原則的に作り切れず、学生の政治的決起を正しくプロレタリア階級独裁・社会主義革命と結びつけて指導しえずにいる。

さらに他方では、原理研、生長の家等の右翼ファシスト勢力がこの数年間とみに台頭し、反革命突撃隊として立ち現われている。

日帝の戦争と反動への熱望の高まりと人民闘争の爆発・発展

学友諸君、読者諸君！

今日、史上三度目の戦争と革命の時代はいよいよ、その全輪郭をクッキリと浮き彫りにしている。中国、朝鮮民主主義人民共和国等を大後方とする民族解放闘争の世界的前進は今年に入り、イラン革命、ニカラグア革命の勝利として発展しているのだ。その下で第二次世界大戦以降、絶対的な世界最大の覇者として君臨してきた米帝国主義の植民地支配が大きく動揺し危機が強制されつつある。だがこうした、米帝国主義の後退と衰退をついて新たにソ連社会帝国主義が世界支配の野望をかりたてて登場し、急速に米ソ第三次世界戦争の要素を増大させている。しかも一方で「社会主義国を大後方とする民族解放闘争が拡大し、社会主義国の祖国防衛戦争と、二流の帝国主義国での社会主義革命戦争が結びつくことが不可避」（綱領草案）という情勢が全世界のプロレタリア階級、被抑圧民族人民の前にひらかれている。総じて、戦争の要素と革命の要素が相互に絡み合いながら発展する。これが現代世界の基本的特徴である。

こうした国際情勢に規定され二流の帝国主義国日本においては、「資本主義の高度成長が破綻し、プロレタリア階級、勤労人民の反抗が増大し、ブルジョア階級独裁が危機に陥りつつある」（同）のだ。まさに「社会主義革命に向けた革命情勢が端緒的に始まりつつある」これが情勢基調であり、今日、様々に生起する政治的諸事件は実に見事にこれらのことを証明している。日本帝国主義の体制的危機の端緒的開始は、不可避に生起し日増しに反抗を強めているプロレタリア階級に対抗するため、ブルジョア国家権力の反動化、肥大化を天皇の政治過程への登場と結びつけて強めている。元号法制化、成田新治安立法、刑法改悪＝弁護士会の自主規制の強制、監獄法改悪等々としてあらわれたこれらのことがらは全て前述したことがらと結びついているし、またソ連社会帝国主義のベトナムを足がかりとしたアジア南下政策への対抗と、アジア特に韓国に対する朴政権を手先とした侵略反革命強化、更には社会主義革命への対抗を目的としたのが、いうまでもなく有事立法である。こうしたことがらは今日、日本帝国主義の反動と戦争策動が新たな局面へ向かいつつあることの証しである。「民主と対話」「連合時代へのかけ橋」として、日共現代修正主義をはじめとする議会主義野党から賛美され登場した大平政権は、ますますこの帝国主義的野望の実現の為にひた走っている。前福田政権が公然とおし進めた戦争と反動の挙国一致体制構築を、修正主義、社会帝国主義政党を動員して「保守、中道」構想をちらつかせることで一層広範囲になし切らんとしているのだ。有事立法の実質化はソ連社会帝国主義の軍事的脅威のキャンペーンを手始めに、ソ社帝太平洋艦隊の増強に対抗して、日米間の安保体制を実質的な戦争体制へと再編強化するものとして押し進められており、今年八月一六日の米第七艦隊在沖米軍を動員した米日共同軍事演習へと行きついている。しかもこの演習がもつもう一つの重要性は、この七月の山下防衛庁長官の訪韓、東京サミット直後のカーター訪韓、在韓米地上軍の撤退凍結発表を受けて朝鮮侵略反革命戦争遂行への準備を内外に公然と明らかにしたことにある。

社会主義労働運動に結合する学生運動を構築せよ！

こうした日本帝国主義の侵略反革命戦争への衝動と反動攻勢は明確に大学―教育の帝国主義的再編と結びついている。七一年六月の中教審三三回答申はその中心環といえよう。しかも、それは今日、学生の政治活動の圧殺を目的とした文部省四・二〇通知へと結びつき新大管法法制化攻撃として策動されている。その内容は以下四点に要約できる。すなわち、①五種八類コースへの複線型再編をもってする、大学―教育の「能力」主義的再編成、これは「多様な能力開発」（帝国主義に奉仕する）の名の下で、研究院、大学院を頂点とする大学―教育の階層性を強化し、差別―選別教育秩序の完成を目論むものである。②それは同時に、学生の自主的活動、政治活動を抑圧し、産軍学協同体制の効率化、労働力創出の合理化を狙う管理支配体制の強化、権限の上部（政府・文部省、学長、理事会）への集中を促すものである。しかも、③かかる再編構想の財源確保のために、受益者負担の論理を大巾に導入し、労働者、勤労人民に二重の収奪を強いるものであり、④「期待される人間像」等をはじめとした国家主義的イデオロギー、天皇制イデオロギーを前面に押し立て大学―教育全過程を戦争と挙国一致体制構築へとなお一層組み込んでいかんとするものである。こうした策動の物質化は七三年に開校した筑波大学の実態がいかんなくわれわれに教えてくれている。ここでは学生の政治活動が全面的に抑圧されるばかりではなく、様々な自主的活動をも完全に圧殺されている。だが、こうした学園での管理支配の強化は全国的な策動として、バリエーションの相違はあれ、今日、各大学の共通の出来事となっている。

〈革命の旗〉の下、先進的学生は人民闘争の先鋒隊たれ！

ブルジョア階級独裁の国家権力が大学―教育の帝国主義的再編をおし進め、差別―選別教育を強め学生の政治的決起を圧殺する管理支配を強めるのは、そこに階級利害の反映があるからに他ならないのであって、その意味からすれば体制的危機の下で日々反抗を強めるプロレタリア階級の闘いに結合した学生の決起があるからである。しかもそのことが人民闘争の高揚に促され、数量的にも増大していることによってブルジョア階級独裁は、支配の危機が始まっていることを暴露してしまっているのだ。だから、われわれが真に革命的学生運動を創出せんとするなら、プロレタリア階級の階級闘争と結合し、言いかえればプロレタリア階級独裁を要に共産主義と労働運動の結合をなし切る、マルクス・レーニン主義で武装し、プロレタリア階級と勤労人民の利益のために社会主義・労働運動と結合した学生運動の一大潮流を形成し、学生の政治活動への決起を促し、その革命的積極性、革命的自覚を呼びさまし、プロレタリア階級独裁・社会主義革命に向けたマルクス・レーニン主義党の建設に固く結合して社会主義統一戦線の確固とした一翼へと学生運動を発展させていかねばならない。また、そのためには、急進民主主義、反スタ・トロツキズムへの厳格な批判とマルクス・レーニン主義、毛沢東思想に基礎づけられたプロレタリア革命路線に真に立脚していかねばならない。

全国二〇〇万学友諸君！

帝国主義の侵略・反革命・差別・抑圧・搾取・収奪などに抗して闘われている人民闘争へ、その全戦線へ革命的学生の巨万の隊列を進出せしめよ！

8.11～12「障害者」・労働者・学生　人が結集

〝われわれの進むべき方向は、何処か？〟

第四回全障連東京大会報告

今大会は、「養護学校義務化阻止闘争の成果をふまえ、固い団結のもと強められる差別と闘おう！」に、七六年全障連結成以後、全国統一課題として闘い抜かれてきた赤堀差別裁判糾弾闘争・「養護学校義務化」阻止闘争の全成果と、「障害者」自らが、差別と闘いそれを打ち破る「障害者」の真に生活に根ざした直接的な日常闘争とをしかり結合し、七九年四月義務制実施以降、さらに強化されてきている政府・ブルジョア階級による「障害者」隔離・抹殺攻撃をはね返し、「障害者」の自立・解放の闘いを進める全障連運動の強化・拡大を課題として開かれた。

大会基調は、七九年一月の文部省闘争へと登りつめた「義務化」阻止の闘いは、「障害者」差別をテコに差別選別の教育体制を確立せんとする攻撃の本質を見すえ、完全実施を要求する全障研の政治的代行主義・隔和主義を大衆的にあばきだし、闘う「障害者」を軸に広範な労働者・被差別大衆との共闘による義務化体制粉砕の巨大なうねりをつくりだすことに勝利したこと、着実に前進していることが報告された。

また、法務省―東京高裁による抗告棄却―死刑執行策動を糾弾し無実の「死刑囚」赤堀政夫さんを生きてとりもどす赤堀闘争においても、昨年一一月、赤堀中闘委結成を機に、差別・分断されてきた「身体障害者」と「精神障害者」との関係を克服し、「病者」「障害者」「健全者」の三者の結合をかちとり、赤堀闘争を「障害者」自らの闘いとして取り組むことが、力強く報告された。

こうした全国闘争と全国各地で闘い抜かれている「障害者」の生存をかけた日常闘争とを固く結びつけ、「障害者」の自立・解放の闘いの展望を切り拓いてきた全障連の更なる闘いの強化は「障害者解放運動ももはや障害者には政治や権力は関係ないなどとは言っていられない時期にきている」のであり、「今こそ、全国の闘う労働者・農民・被抑圧大衆と、闘いによる結合をかちとり」「より多くの障害者大衆に依拠し、障害者解放の課題を、労働者人民全体のものとして提起し、われわれの進むべき方向性を明らかにすること」によって、果されていくことが、大会の名において鮮明に確認されたのである。この確認は、「障害者」解放運動の一大画期をなすであろう。

「われわれの進むべき方向」はどこか。然り、「障害者」解放運動と社会主義・労働運動を結合し、ブルジョア階級独裁を樹立し、資本主義を廃止し、社会主義を建設することである。

続く、交通・生活・教育・労働・施設・赤堀闘争の六つの分科会では、義務制実施以降の驚くべき差別選別体制の強化、財政難を理由とする福祉の切り捨て政策の拡大、更に、行政型地域福祉論などの融和政策、力による思想弾圧体制の強化という、「障害者」差別攻撃が激化する中で、自立・解放に向けた各地の実践が報告されていった。闘いの中で、「障害者」同士の関係のあり方、「障害者」と健全者とのあり方をも実践的に変革し強固な闘いが形成されていることが報告され、こうした闘いの一切が全障連運動のより一層の拡大・組織的強化へと集約されていくことが確認されていった。

全障連第四回大会は、全体会―分科会を通し、「障害者」の自立・解放闘争の強固な戦線の構築をめざし、二日間の日程を成功のうちに終えていった。

戦争と革命の80年代を

社会主義労働運動を創建し闘い抜け！

今日、これまで日本の労働運動に君臨し続けてきた改良主義指導部たる労働官僚どもは今や我先にと雪崩れをうって労働運動の右翼的再編の先陣争いをしている。

今夏、総評大会をはじめ全てと言っても言い過ぎでないほど、ほとんどの労組大会で議論になった労戦統一問題において「民間先行」か「全的統一」かの手順の差はあれ、こぞって「労戦統一は時代の要求」とばかりに動きが開始されている。

しかも総評・富塚に至っては、「この道を進む以外にない」「このままでは総評は足腰が立たなくなってしまう」と叫びたて、あからさまに総評労働運動の右翼的再編こそが総評の生き延びる道であると説いて回っているありさまである。

しかるに、一方では昨年末の全通の越年闘争、住重浦賀・玉島・佐伯をはじめとする全造船の各分会の闘いが示しているように湧き立つような闘いの高揚も創りだされている。このような闘いの現場では今日進行する右翼的労戦統一の論議それ自体がはいりこむ余地はなく、全通においても下部組合員大衆と石井―保坂執行部体制との亀裂は深まる一方である。実際この間全通執行部は「当局に処分を出させないことが重要だ」として処分の出ないような闘争に限定し、更には闘争それ自体を放棄し「中期路線」なる労使協調路線を一層露骨に推し進めている。

また、この間の「減量経営」なる暴力的大合理化攻撃にさらされた全造船の闘いは、地域での共闘と全国的な支援体制を創り出してきた。そこでは同盟・造船重機労連との実力対峙も含めて闘う以外労働者の生きる道のないことが身をもって示されてきた。

ブル独の擁護か プロ独の準備か

では、かかる現状は何を示しているのであろうか。それは今日の情勢が否応なく労働運動内部に帝国主義と社会主義の分裂をつくり出さずにはおかないことと分かちがたく結びついたものであるということである。

まず、このことを規定する第一のものは今日、「出口なき不況」と言われ危機を深める日本帝国主義が現局面の打開を一層の反動化と帝国主義戦争に求め、そこへの労働者階級の一大動員を図らんとしていることにある。このことに対して労働運動が、挙国一致体制作りに加担し、資本主義と運命をともにするのか、さもなくば、事態の根本的解決をプロ独―社会主義革命への道に見い出すのかを巡る分水嶺がこの分化と再編を貫いているのである。

前者は言うまでもなく、総評指導部をはじめとする改良主義指導部の破産と末路を示している。それは労働運動を資本主義の「民主的改良」なるギマンの下に導き入れ、結果として自ら労使運命共同体なるブルジョア思想につかりきったものである。

それは今日では公労協でのマル生の強化、人員削減攻撃、民間大手の指名解雇、労組破壊攻撃に対して何一つとして徹底して闘おうとしないということにおいて労働者大衆からの不信を増大させている。

かかる局面においてこそ、全通全造船および全金本山支部をはじめとする戦闘的争議拠点の闘いとその防衛が闘う労働者共通の任務とならなければならない。そして更にはかかる闘いを労働運動の最前線に登場せしめることをもって労働運動の右翼的再編に対抗しなければならない。今こそ闘う労働者が労働運動の指導権を改良主義指導部の手から奪いかえしていかねばならないのである。首都圏の先進的労働者を結集して闘いとられた「九・八右翼的労戦統一に反対し、労働運動の戦闘的再生をめざす労働者集会」こそ、その闘い、を示している。（詳細次号）

『革命の旗』号外を読もう！

このようにして闘う労働者の反撃はすでに開始されている。だから、われわれは労働者大衆の前に今日の分化と再編が他ならぬ労働者階級自身に戦争への道か、革命の道かの選択を迫るものに他ならないこと、今こそ労働者階級は断乎たる革命的行動に打って出る必要のあることを訴えなければならない。わが党は、すでに以上の観点をしっかりと踏まえ、九月五日付「革命の旗」号外を、社会主義と労働運動の結合をかちとる実践的指針を提起するものとして発行し、労働者大衆の中へ大胆に宣伝・煽動を開始した。

すべての闘う労働者諸君！　わが党と共に、あらゆる工場・拠点をプロ独の拠点につくりかえよ！

プロレタリア階級・勤労人民にしっかり根づいたカンボジア人民支援闘争を打ち立てよ！

長期にわたるカンボジア人民の抗ソ抗越救国闘争はすばらしく前進してきている。とりわけ雨期攻勢は、ベトナム侵略軍を点と線の状態に釘付けしている。七月一九日の民主カンボジア放送は、現在の軍事情勢を「雨期に入って人民に有利に動きつつある。」と総括している。とりわけ人民戦争を引きつづき強化し、遊撃戦の発展に力を入れることを民主カンボジア人民に呼びかけている。

こうした現在の状況はベトナム侵略軍が、またそのカイライ政権がカンボジア人民の支持を受けることさえできず、ただ米帝軍の二の舞に陥っていることを示している。ベトナム侵略軍は、食糧供給ができないばかりか、カンボジア人民からの略奪でそれをおぎなおうとしており、侵略軍としての彼らの行動は、カイライ軍との矛盾さえ深めている。民主カンボジア放送は、四つのカイライ軍大隊の反乱と民主カンボジア軍への合流を伝えている。

こうしていまや、カンボジア人民の救国闘争は西側帝国主義のデマ宣伝とは異なって、全民族的団結をもって抗ソ抗越のための統一戦線が結成される攻勢へと向いつつある。

またベトナム国会常任委員会副議長のホアン・ドン・ホアン氏は歴戦のベトナム革命家として、今日のベトナム共産党の誤り・現代修正主義への変質と、ソ連社会帝国主義への従属化の進行に抗議するため、中国に亡命した。彼は『ベトナム同胞への手紙』を北京で発表し、その中で「今日のベトナムはレズアン一味の支配下で、もはや独立自主の国家ではなく、経済・政治・軍事・外交のいずれを問わず外国に従属している」と語り祖国の革命を望んでいることを訴えた。この一つの事実からしても、ベトナム共産党の現代修正主義的変質は明らかになってきている。

ベトナムはこの間、難民追放政策を進め、数十万にのぼる人々を追放してきた。これは、プロレタリア階級が社会主義経済の管制高地を握りしめ、それを基礎とし、階級闘争を要とし、説得と改造を通じ、小生産者を集所有制へと導いていくのではなく、階級闘争を放棄し、プロ独を行政と統制に一面化し、従って小生産者の集団化に対する小所有者の見地からの反抗を、追放という形でしかおしすすめることができなかったことを物語っている。こうしたベトナムの「難民政策」はアジア諸国の不満をかきたてたのみならず、全世界人民の批判のまととなっている。

11・2 カンボジア支援 東京集会へ！

全世界の被抑圧民族・人民そして国際プロレタリアートは必ずや、このベトナム指導部の政策と、かつカンボジア侵略・併呑の現代修正主義・社会帝国主義的本質をつかみとるであろう。

全世界の革命的翼と民主勢力は、カンボジア人民の抗ソ抗越救国闘争に熱烈な支援を開始しはじめた。各国のマルクス・レーニン主義党は現代修正主義批判をもって、また被抑圧民族と団結せよ、というレーニンの教えに従って、カンボジア人民の人民戦争支持の闘いを組織しはじめた。

六月二十日と七月一日パリにおいては、ジアンミュルダール・アンドレイ博士等四名の呼びかけによって、カンボジア人民支援国際会議の準備会議が開催された。この国際準備会議は、「ベトナムの侵略に反対して民族独立をめざすカンボジア人民の闘争と連帯する国際会議」として、全世界人民に民主カンボジア人民の抗越救国闘争支持行動を呼びかけ、次の三点を当面する課題として掲げている。

①ベトナムの即時無条件撤退とカンボジア人民の民族主権の擁護、②民主カンボジア人民に対する支持と物質的援助、③全世界に民主カンボジア支援活動を拡げ強化することである。

日本でもこの国際会議の呼びかけに応えて十一月二日に国内大集会が、日本カンボジア友好協会等、多くの団体・個人が参加した「支持委員会」のもとに開催されることが決定した。とりわけこの間のわが国での民主カンボジア人民支援活動は、多くの努力にもかかわらず大衆的運動として、いまひとつ高揚していない運動の現状を見つめ直し、この秋の国内集会を成功させ、人民運動として広汎に形成していかなければならない。

この際、依然としてベトナムに援助をつづける日帝の形式的な「カンボジア国民の救済のための食糧援助」案に一喜一憂した運動ではなく、むしろその仮面をはぎとり、労働者大衆にしっかり根づく闘いとして押し拡げていく必要がある。この力に立脚し、日本政府のベトナム援助をやめさせる闘い、そして日共・協会・第四インター等ソ社帝を擁護し、ベトナムの覇権主義を賛美する部分と闘いつつ、広汎な人民の結集を闘いとることこそが国内集会成功のカギである。

とりわけわれわれは、日本帝国主義の現段階が朝鮮侵略反革命の強化と戦争策動への第一段階にあること、また他方では日帝が第三世界の要求に譲歩を一時的にとるとはいえ、依然として帝国主義の侵略と抑圧は強化されていることを暴露していかなければならない。

民主カンボジア人民の正義の闘いは、第三世界の多くの被抑圧人民の支持を得ており、今日の、また近い将来必ずや現代世界の変革の主流として登場するであろう。

International Bulletin nr.2·1979

国際集会への招請文（ストックホルム発）

反日反米朴打倒をめざす 新しい風が吹いている！

八月十一日、韓国ソウル市新民党本部に、武装した機動隊一千あまりが乱入、YH貿易の廃業―首切り攻撃に抗議の籠城を闘っている。同時に、これに反対する労働者・農民やキリスト教関係者の闘いと、この下からの圧力を受けた新民党・金泳三体制の確立、民主統一党の吸収―反朴民主派としての野党勢力の再生が結びつき、シンパラム（新しい風）と呼ばれる民主化運動の大高揚が開始されつつある。

とりわけ九月八日、金総裁ら新民党幹部に対する職務執行権停止の仮処分決定に対し、拡大幹部会議はただちに「仮処分拒否」を打ち出し、十日には〝朴政権打倒宣言〟を発し、断乎闘う態勢に入った。文字通り〝シンパラム〟は韓国全土を席巻しつつある。

八月一八日より、「フォートレス・ゲイル」軍事演習が、米第七艦隊、海兵隊四万を動員して、沖縄を中心にアジア全域を対象にして行なわれた。特に二六日には沖縄人民の反対の声を踏みにじり、沖縄戦を上回る大規模、かつ高度な上陸演習が沖縄本島全域にわたって強行された。

この上陸演習はミンスク、イワン・ゴロフを中心としたソ連極東艦隊に対し、空母キティホークと共に新鋭強襲揚陸艦タラワの配置によって米帝の軍事的優位を誇示すると共に、北を強襲し、南から上陸するという朝鮮を想定したきわめて実戦的な演習である。

こうした米日韓の反革命臨戦体制は、沖縄の全島軍事基地化、沖縄人民を日帝の軍事属領下での災厄に叩き込むことを通して打ち固められているのである。

日帝による沖縄併合七年を経て今や、沖縄人民は復帰運動の破産と混迷の中から、「西銘県政」の登場とあいまって、差別・同化攻撃と対決し、併合主義の一切を拒否して新たな闘いに着手しつつある。日米共同侵略反革命前線基地解体の闘いを先頭とする沖縄人民の自決権を断乎として支持し、日本―沖縄のプロレタリア階級・勤労人民の革命的団結を形成していかねばならない。

そしてこの事態に、朴と、否それ以上に動揺しているのが日本帝国主義である。仮にYH貿易が日本系資本であったら、明らかに韓国全土を反日暴動が席巻し、重大な事態に達したであろうことは明白である。そうであるがゆえに日帝、米帝は、朝鮮焦土化ともいえる戦争体制のエスカレートに奔走している。

八月十一日訪米した山下防衛庁長官は、ペンタゴン、NATO本部を訪れ、とくにブレジンスキー持別補佐官と会談し「米日韓三国の安保がアジアの平和の中核」で合意した。

われわれは、今や実戦段階にはいった日米韓の戦争体制に反対し朝鮮人民の自主的平和統一、反朴・民主の闘いに連帯していかねばならない。とくに日本共産党は、「前衛」九月号において不破書記長名で、朝鮮の南北統一に関する七二年七・四共同声明に対し公然と反対を表明した。「この声明は韓国、米政府の意向が反映している」ときめつけた上で、「日本共産党は自主独立の党であり、共和国政府のひとつひとつの政策に追従するものではない」というのがその論旨である。

だが何よりも七・四共同声明は朴を除くすべての朝鮮人民の総意であることは、韓国民主勢力の声明をみても明らかである。さらにこの声明が、統一と民族解放・民主主義革命が一個不可分のものであることを示していることは、共産主義者なら自明であろう。逆にいえば、まさにこの不破論文は現代修正主義・日共が日帝、さらにソ社帝の代弁人として朝鮮人民に敵対し、帝国主義の分割の論理をおしつけてきたことの、証左である。このような日共の南北分断固定化への肩入れを許さず、自主的平和統一、民主の闘いに連帯し日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命を戦取せよ！

国道58号線をわがもの顔で行軍する在沖米軍

空港廃港・二期工事実力阻止・農振策粉砕

9.16三里塚現地へ結集せよ！

『たたかう農業』建設・空港粉砕へそびえたつ木の根大風車

社会主義労働運動と農民運動を結合せよ！

昨年の五・二〇強行開港以降、一年有余を経た三里塚闘争は今重大な局面に入っている。

現在、二期工事着工を強行せんとする政府・公団と、これを許すことなく実力闘争を堅持し、更なる闘いを展開する反対同盟農民・労働者・学生との激烈な対決としてある。二期工事着工を虎視眈々と目論む政府・公団は、三里塚闘争を解体するために様々な攻撃を行なっている。その頂点として、「話し合い」攻撃、農業振興策―成田用水攻撃がある。

七月一六日、運輸大臣森山は、記者会見の中で「成田空港の二期工事年内着工は、政府・空港公団と千葉県及び関係市町村との間にまだまだ解決していかなければならない問題があり、関係農民とも必らずしも十分な意志疎通がはかられていない。そこで農民の皆さんと一層の意志疎通をはかるよう全力を尽すので、農民の皆さまも胸襟を開いて話し合いに応ずるように切に要望する」と述べた。

この森山の「対話」表明とは、反対同盟の闘いの前に、力づくでは二期工事を強行できない政府・公団の、反対同盟解体を策すものであり、三里塚一四年の中で培われてきた労働者・農民の団結を切り崩さんとする攻撃であり、そのことを通じて今日ほうはいとして湧き上りつつある全国農民の闘いを芽のうちにつみ取らんとするものに他ならない。それは疑いもなく、ブルジョア階級の帝国主義戦争の本格的準備・「挙国体制」創出に全線を組み込んでいかんとする野望に裏打ちされている。

これに対して、反対同盟は七月二〇日、「二期工事着工のための『話し合い』は一切拒否する」との幹部会声明を発し、政府・公団の反対同盟解体―分断攻撃をはねのけて闘い抜くことを宣言した。われわれは、七・二〇幹部会声明を支持し、反対同盟との団結を一層強化し、この決意に応えて闘い抜いていかなければならない。

闘う農業建設万才！

政府・公団は「空港と地域社会の調和」（―世界再分割戦・帝国主義戦争の準備と地域社会の「調和」と読め！）の名の下に、騒音対策の見返り事業として「空港周辺農業振興策」と「成田用水事業」をすすめてきている。昨年一二月閣議決定された農業振興策と成田用水事業こそは、水田利用再編対策・地域農業生産総合振興事業の三里塚版としてあり、三里塚農民を農業政策の面からも再編し、反対同盟の分断・解体を策し、二期工事着工を強行せんとするものである。

これに対して、反対同盟は「闘う農業」を築き上げることをもって政府・公団の策動と対決せんとしている。「闘う農業建設」は、空港「用地」内＝木の根に自力で畑地かんがいを建設することをもって、実力闘争の拠点と農業の新しい創造・農民の新たな共同的組織化をめざして闘うその第一歩を踏み出している。「闘う農業建設」への三里塚農民の試みと努力は、たとえそれが第一歩であるとしても、政府・公団の農業振興策にみられる策動と鋭く対決すると共に前記の農業政策全般と対決する内実を孕むものとして展開されるであろう。

この中で農民の大多数を擁する農協官僚は、「食管制度を守れ」と積極的に減反に加担し、今また農業の「合理的再編成」に、金融独占資本・ブルジョア国家の下請機関、代理人として農民への敵対を強めている。

同盟・JCや右翼的労戦統一を叫ぶ労働貴族は「農民は過保護である」と金融独占資本と一体となって吹聴し、「農産物輸入の自由化、米価据え置き、土地の収奪を強力な行政指導により達成せよ」と政府に要求し、労働者と農民に対立を持ち込み、農民に対する敵対を強めている。それは、労働者の首切り、合理化を推奨し、ブルジョア国家に忠誠を誓い、「国防協力」をうたい、ブルジョア階級の手先として、労働者階級をブルジョア階級独裁にしばりつけ、帝国主義戦争に動員せんとする策動の不可分の一環である。

帝国主義への屈服か プロ独・社会主義をめざす前進か

このような被搾取勤労農民を取りまく情勢にあって、一四年にわたる三里塚農民の不屈の闘いは、新たな闘いに決起しつつある全国の農民運動にとって大きな励ましとなっており、今また「妥協と屈服への誘い」を拒否して実力闘争の道を固め、「闘う農業建設」へ踏み出すことによって、新たな一歩を付け加えた。そして全国の先進的労働者と千葉動労は、内外の妨害・敵対をはねのけ、三里塚農民との団結・連帯を守ることを自己の使命として、人民闘争の先頭に立っている。同時に、暴力的な資本攻勢と労働貴族の敵対・右翼的戦線統一・改良主義の破産を突き破る反撃戦を闘い抜いている。この両者は固く結びついているし、また結合しなければならない。この闘いの中から、自分達の未来が資本主義体制の内にはなく、現状の根本的打開が社会主義革命と結びつかなければならないという自覚が生まれつつあり、今では「社会主義をめざす労働運動」が先進的労働者の共通のスローガンとなり、〈帝国主義と社会主義の分裂〉を激化させ、社会主義統一戦線の条件を拡大・成長させつつある。

この条件を、より確かなより広いものとし得るか否か、それが三里塚農民と労働者階級の結合の内実として問われている。

帝・社帝の攻撃に抗し、全ての先進的労働者は9・16へ

既に三里塚芝山連合空港反対同盟は、九月一六日の現地闘争に向けて全国の労働者・農民・学生に大結集を訴える激を発した。またそれに答えて東峰団結小屋は、三里塚闘争の実力闘争の地平を堅持し、二期工事阻止闘争をめぐる労農団結の闘いをおし拡げるべく、九・一六闘争への結集をよびかけ実行委員会を形成している。

わが同盟は、九・一六が新たな前進、社会主義・労働運動と農民運動の結合に向けた前進の礎をつくり出すよう全力をあげて奮闘する決意である。とくに先進的労働者の中に、右翼的労戦統一に対決して社会主義・労働運動を創出し日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命をめざして人民闘争の先頭に立って闘う自覚と決意をよびさまし、強固な革命組織でもって革命的行動への移行を促していくために、粘り強い、系統的な宣伝・煽動・組織化の活動をくり広げ、このよびかけに答える背骨をつくり出し、九・一六現地闘争の中に刻印していかねばならない。

われわれはこのためにも、次の三つの政治傾向・部分に対する批判を明確にしておかねばならない

「話し合い」路線粉砕

その第一は「三里塚闘争の現在の環は、『話し合い』に応ずることであり、『話し合い』によって譲歩を引き出すことである」と主張してやまない部分である。彼らは以前から「話し合い＝民主・大平」と、大平政府を賛美してやまず、「天皇制官僚独占＝対ソ融和ファシズム派と民間独占＝反ソ民主派の対立」と「体系化」し、反ソ祖国擁護の大連合を提唱してきた。そして「労働戦線統一問題」についても、右翼的・帝国主義的戦線統一を、「それが『反ソ・民主・改良』である側面を重視して、支持・利用し、下から押しあげよ」と呼びかけている。こうして彼らは、七・一「北方領土返還集会」のブルジョア民族主義の泥沼に更に深く身を沈めつつ、到るところで、革命的闘争を放棄して、「民主派」ブルジョアジーとの妥協と連合による「譲歩の引き出し」に進むべきだと説いている。何と、こういう「反覇権反ファッショ人民連合」「革命と社会主義の現段階での準備」と偽り、闘う労働者・勤労人民を欺いている。彼らは社会主義を民族＝自由主義に換骨奪胎し、〈大平部分連合〉の隠れた支持者として、新手の修正主義の道を走っていると言わなければならない。

要はプロ独の準備である

第二に、「実力闘争の堅持」というそれ自身としては正当な方針を「社共政権に結びつけている政治傾向・部分である。彼らはこのことによって、今日の人民闘争を社共の影響力に結びつけ、ブルジョア階級独裁に対する日和見主義と資本主義の「民主的改良」にいざなっている。しかもこの資本主義の「民主的改良」なるものは、「日米安保体制から日ソ安保体制・ソ社帝とのブロック化への転換」・「ソ連―日本―ベトナム・東南アジアの国際分業」であり、覇権主義と重層的な国際的支配・収奪体制に他ならず、農業問題に即していえば、むしろ日本での農業・農民解体とアジア諸国の農業収奪に他ならない。このことが、彼らのこの間のベトナムのカンボジア侵略に対する態度と主張によって浮き彫りにされている。人民闘争を実力闘争として闘うという、かかる政治傾向・部分の「善意」は、人民闘争を現代修正主義・社会帝国主義の擁護、その庇護へと結びつけるという「地獄への道」と背中合わせとなっているのだ。

第三に、「五・二〇以降の三里塚闘争の原点の再確立」「実力闘争の堅持」「三里塚反対同盟と千葉動労との血盟」を基軸に、現在の三里塚闘争の一牽引者としての役割を果している政治傾向・部分である。われわれはこの意義を決して否定するものではない。しかし今問題となっているのは、「実力闘争の堅持」一般にとどまることなく、またそれを「内乱」として粉飾する空論をもてあそぶことでもなく、社会主義革命の準備に固く結びつけ、社会主義統一戦線の形成に結びつけることであり、その王導者としての社会主義労働運動を創出し、これに結びつけて三里塚闘争を全国農民闘争の牽引者へと押し上げていくことである。急進民主主義からマルクス・レーニン主義への転換をもって、人民闘争をプロ独・社会主義革命の準備に固く結びつけて、その新たな発展を支え抜くことこそ、三里塚闘争を共に担う「革命党派」に要求されている「党的役割」に他ならない。あらゆる苦難に打ち勝って闘いを堅持する三里塚農民の「この闘いに結びつけ、どの方向をめざして何の準備に結びつけるべきか？」という模索に、先進的労働者はしっかりと応えていかなければならない。

革命的党活動を確立せよ！

三・二六～五・二〇から始まった帝国主義への屈服か、プロ独・社会主義革命をめざす前進か、という試練は、体制的危機の深まりブルジョア階級独裁の反動化の進行、帝国主義戦争の本格的準備によって一層促進され、人民闘争を担ってきた諸潮流・諸政治勢力の分化・再編を一層鋭くしている。

だからこそ、われわれはいよいよもって、日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命の戦闘旗を更に高く掲げ、労働者階級の階級闘争と人民闘争をこの下に組織し、教育・訓練して、現実の力としていく革命的活動を、更に更に鍛え上げていかなければならない。

9・16 実行委開かれる

東峰団結小屋アピール

九・一六全国総決起集会を前に十日、東峰団結小屋呼びかけによる九・一六実行委員会が東京で開かれ、首都圏はじめ各地から闘う労働者・学生が集った。今年三・二六現地闘争以降、より広汎な人民の現地決起と援農闘争を呼びかけてきた東峰団結小屋は〝二期工事着工阻止！農振策粉砕！〟を掲げ闘い抜いている。そして更に全国の労農学と三里塚現地を結ぶ拠点として打ち固めるべく、〝団結小屋維持会員〟を募っている。全国の労働者・農民・学生諸君！政府―公団の『対話』攻撃と対決する反対同盟に応え全力決起せよ！

東峰だより

連絡先 0476―32-0505

8月7日 木の根かんがい用水に対して、形質変更の許可権限をもつ千葉県当局は①かんがい用水施設は農業用水獲保を目的とする ②空港建設工事完成のため明白は支障となった時には自主的に撤去する ③当該地域に同種の施設を設置しない、との確約順守を条件に許可。

8月10日 熊本市で開かれた動労第三五回定期大会で運動方針案に対する質疑が行われたが、千葉問題で「処分はタナ上げにして統一の話し合いを進めるべきだ」との修正動議が水戸、秋田、仙台など十二地本の代議員から出され、「応じられない」とする執行部と対立、修正案は二九三人中に七〇人の賛成、否決された。

8月15日 東峰部落で、反対闘争によって一時中断していた盆踊り大会が再び開かれた。稲刈りと秋の闘いに向けて、天神峰など他部落の人々もかけつけ、盛大に催される。

8月25日 第四次空港整備六ケ年計画発表。投資規模三兆二千二百億円、成田分四千五百億円（その他関西国際空港整備費一兆一千九百億円、羽田拡張二千三百五五億円など。七四空港のうち四二空港（現在二三空港をジェット化空港にする計画。

8月29日 七八年五・二〇闘争で起訴されその後、東京地裁に移送された三被告に対し東京地裁・小林充裁判長は全員に懲役二年（執行猶予三年）の判決を下した。判決に抗議する被告全員と傍聴者一人を監置十日間の身柄拘束にする。